

2009年度
「学生による授業評価アンケート」
報告書

2009年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会



立教大学

2010年10月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の「学生による授業評価アンケート」の報告書も、この冊子で6冊目になります。開始当初は、評価を受ける教員にも評価を行なう学生にも、不慣れなことによる戸惑いがあり、授業熱心な教員がかえって反発したり、学生の一部が匿名性を悪用して記述欄に中傷を書き込む等の一定の齟齬が生じたことは確かですが、そのような初期の混乱は、実施委員会の努力と学内の意識の向上によってかなりの程度克服されているとすることができます。

しかし、初期の混乱の克服によって、もしも戸惑いと齟齬そのものが消滅しているように見えていたら、それはアンケートがルーチン化して、その本来の役割を果たさなくなっていることを示しているにすぎません。では「学生による授業評価アンケート」の本来の役割とは何か。それは、戸惑いと齟齬を消滅させるのではなく、それらを授業空間の表面に露出させることにほかならない。初期の混乱はそれが粗野な形で現れたものだというべきです。

「学生による授業評価アンケート」が戸惑いと齟齬をあらわにすることをその目的として実施されるのは、言うまでもなくそれが教育という営みの一環であるからにほかなりません。これまで受けた授業を顧みるとき、興味を引かれた授業はそれまでの知識が揺るがされる体験に充ちたものであったことに想い至るでしょう。また、一度でも授業というものを行なったことがある人であれば、それが単なる既存の知識の伝達などではなく、一瞬ごとの格闘であることを知らないはずがありません。戸惑いと齟齬は授業と本質的に結びついている。あるいはむしろ、無数の戸惑いと齟齬を不断に生み出しつつ、それらに何らかの方向付けを行なおうとする際限のない営みこそが教育だと言うべきでしょう。

立教大学の「学生による授業評価アンケート」は当初からそのことを意識してきました。授業時間中に実施されたアンケートを単に集計するのではなく、それぞれの授業を担当した教員の「所見」を掲載すること、そしてそれを閲覧可能にすること。このプロセスを組み入れることによって、本学の「学生による授業評価アンケート」は、戸惑いと齟齬の存在をあらわにするための仕組みとなりえたのです。

授業を強くしなやかな知性が互いに鍛え合う場とすること。教室をそれらの知性がのびやかに活動する場とすること。そのために本報告から戸惑いと齟齬の在処を読み取っていただければ幸いです。

目次

はじめに	
1. 授業評価アンケートの実施目的	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 2009年度の実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 実施科目の選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	25
4-4 社会学部	28
4-5 法学部	30
4-6 経営学部	33
4-7 異文化コミュニケーション学部	36
4-8 観光学部	39
4-9 コミュニティ福祉学部	41
4-10 現代心理学部	43
4-11 全学共通カリキュラム	46
4-12 学校・社会教育講座	51
5. 2009年度のまとめと今後の展望	53
6. 集計データ（資料編）	55
6-1 回答者数	55
6-2 科目開設学部等別平均値	56
6-3 「グループ集計」科目一覧	68

1. 授業評価アンケートの実施目的

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

また、実施目的は変更していないが、アンケート4年目である2007年度からは、実施対象科目の選定方針を変更した。詳しくは「1-4 2009年度の実施科目の選定方針」(p.4)を参照されたい。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、

学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.5 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生

による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが 1 冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004 年度報告書より転載)

1-4 2009 年度の実施科目の選定方針

2009 年度は 2007、2008 年度年度に引き続き、実施目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」ことの 2 点に比重を置いて実施した。具体的には、実施科目の選定方針を「1 教員 1 科目」に限定せず、各学部が必要に応じて選定することを可能とした。

選定の例としては、授業の目標・内容が一定程度共通で複数コマ展開している科目（「基礎演習」や「入門演習」など）や必修・選択など科目の属性による選定、大人数科目などが挙げられる。詳細については、「2-3 実施科目の選定方針」(p. 11)を参照されたい。

なお、2004 年度から 2006 年度までの 3 年間は、1 教員 1 科目の原則で実施した。

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

アンケートの質問紙は、5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2009年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（3設問）、観光学部（7設問）、現代心理学部（4設問）、全学共通カリキュラム（3設問）が学部設問項目を設定した（p. 10 参照）。

2009年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 (1) (2) (3) (4)
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	本学学部生以外 (99)
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。 4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。 6. 折りまげたり汚したりしないこと。
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	(5) (4) (3) (2) (1)
2) この授業に積極的に参加した	(5) (4) (3) (2) (1)
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	(5) (4) (3) (2) (1)
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	(5) (4) (3) (2) (1)
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	(5) (4) (3) (2) (1)
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 各回の授業内容の量が適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 各回の授業のねらいは明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 各回の授業内容は明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
5) 十分な静粛性が保たれた	(5) (4) (3) (2) (1)
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
7) 板書のしかたが適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	(5) (4) (3) (2) (1)
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 自分で調べ、考える姿勢	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	(5) (4) (3) (2) (1)
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業全体の目標が明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 学問的興味をかきたてられた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) この授業を受けて満足した	(5) (4) (3) (2) (1)

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

(文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

(経済学部)

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
 - 2) (基礎演習) 自分の意見を積極的に言えるようになった
 - 3) (基礎演習) レジюмеやレポートを作成できるようになった
 - 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった
 - 5) (情報処理系科目※) Power Point ファイルの作成ができるようになった
 - 6) (情報処理系科目※) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できるようになった
- ※情報処理系科目とは、情報処理入門・情報処理入門2をさす。

(理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 2) (1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 3) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

(観光学部)

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ(観光学部以外の学生は答えないこと)
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う
- 3) わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している
- 4) わたしは、旅行することが好きだ
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

(現代心理学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

(全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 実施科目の選定方針

「学生による授業評価アンケート」は、2004年度に開始して以降3年間、講義科目を対象に1教員1科目の原則で実施してきた。2009年度は、2007、2008年度に引き続き、目的を「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」ことに比重を置き、各学部・学科等の必要性に応じて選定を行った。

実施科目は、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）を対象とし、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目は対象外とした。

<科目選定方針一覧>

学部等	科目選定方針
文学部	(1)各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2)文学部基幹科目 (3)各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1)「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない。また、2006年度まで実施してきた科目は原則として実施しない (2)共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年目科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理学部	(1)数・化・生命理学科は、原則各教員1科目実施 (2)物理学科は、全ての講義科目を原則とする。大学院の併置科目は除く (3)原則として複数担当科目は除く
社会学部	(1)必修科目、選択必修科目は原則としてすべて実施する (2)「講義科目1教員1科目」となるように選定作業を行う (3)産業関係学科の科目は実施しない
法学部	入門科目を選定し、その後「講義科目1教員1科目」を原則として選定する
経営学部	(1)講義系（リテラシー関連の実習含む）全科目で実施する (2)基礎ゼミで実施する
異文化コミュニケーション学部	CS科目を除く必修科目のうち、共通シラバスを用い、授業の目的及び内容に共通性があり、複数コマ開講されている科目
観光学部	(1)2010年度（もしくは2011年度）カリキュラム改編へ向けて進めている検討作業において、学部・学科の基本的授業科目と位置づけられているものを中心にアンケートの対象とする。 (2)専任教員に関しては、原則、1つ、担当科目をアンケートの対象とする（学部長、研修休暇中の教員等を除く）。 (3)1人の教員に関して1つの授業科目のみをアンケートの対象とする。 (4)「***1」「***2」といったペア科目については、基本的な内容の「***1」の方をアンケートの対象とする。
コミュニティ福祉学部	(1)1教員（専任教員・兼任講師とも）1講義科目を原則とする。選択に際し、複数教員担当科目は除き、次の①～④に示す科目を優先する ①追加授業日を設定した社会福祉士・精神保健福祉士国家試験指定科目 ②社会調査士資格指定科目 ③スポーツウェルネス学科2009年度新規開講科目 ④昨年度と別科目 (2)演習・実習系の科目は対象としない
現代心理学部	(1)「総合展開科目」全科目 (2)初年時教育科目 (3)講義科目すべて。このほか、心理学科2年次「心理学文献講読1」、「心理学文献講読2」及び映像身体学科2年次「基礎演習」
全学共通カリキュラム	全カリ総合Aのうち講義系科目を担当する教員1名につき年間1科目の実施
学校・社会教育講座	各課程とも「講義科目1教員1科目」実施とする 教職課程は、上記原則に加え、履修者数5名以下が予測される科目は対象外とする

2-4 実施科目数

実施予定科目数、実施科目数、所見票の提出数に関して、科目担当者を専任と兼任に分けて下の表にまとめた。全学の実施率は 98.5% (1,256/1,275)、所見票提出率は 77.1% (968/1,256) であった。

通年科目で前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期1科目および後期1科目としてカウントした。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	175	109	66	171	108	63	129	81	48
経 済 学 部	70	43	27	70	43	27	63	39	24
理 学 部	104	45	59	102	45	57	87	35	52
社 会 学 部	134	65	69	134	65	69	95	47	48
法 学 部	63	26	37	60	24	36	53	22	31
経 営 学 部	163	84	79	161	83	78	101	58	43
異文化コミュニケーション学部	18	12	6	18	12	6	16	11	5
観 光 学 部	39	27	12	39	27	12	25	16	9
コミュニティ福祉学部	102	55	47	101	55	46	82	48	34
現 代 心 理 学 部	117	60	57	116	59	57	79	38	41
全学共通カリキュラム	227	113	114	221	110	111	179	89	90
学校・社会教育講座	63	45	18	63	45	18	59	41	18
合 計	1,275	684	591	1,256	676	580	968	525	443

注) 所見票提出数は、2010年6月28日現在

2-5 実施期間

実施は、①授業が進行した後半の時期が好ましい、②試験の時期は避けることから、下記の期間とした。下記期間内に実施できない場合は翌週に実施した。

前期 : 2009年6月25日(木)から7月1日(水)

後期 : 2009年12月7日(月)から12月12日(土)

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	7,622	5,272	3,570	2,293	11,192	7,565
経 済 学 部	1,412	1,271	2,358	1,482	3,770	2,753
理 学 部	3,288	2,191	3,460	1,957	6,748	4,148
社 会 学 部	8,683	5,226	7,894	4,254	16,577	9,480
法 学 部	8,330	3,163	8,780	2,963	17,110	6,126
経 営 学 部	8,432	4,579	7,530	3,848	15,962	8,427
異文化コミュニケーション学部	277	257	130	123	407	380
観 光 学 部	4,295	3,031	2,567	1,754	6,862	4,785
コミュニティ福祉学部	5,527	3,526	6,464	3,646	11,991	7,172
現 代 心 理 学 部	5,913	3,818	5,790	3,295	11,703	7,113
全学共通カリキュラム	19,679	10,814	18,778	10,609	38,457	21,423
学校・社会教育講座	3,184	2,480	978	754	4,162	3,234
合 計	76,642	45,628	68,299	36,978	144,941	82,606

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、「所見集」としてまとめ、イントラネット上および下記の図書館において学内者の閲覧に供している。

池袋本館および新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム

社会科学系図書館：経済・社会・法・経営・異文化コミュニケーション学部、
全学共通カリキュラム

自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

アンケート実施後1~2ヶ月に下記の集計結果をWEB上に掲載し、所見の執筆を依頼した。

- ① 集計結果票 (p.16 参照)
- ② 「記述による評価」一覧票
- ③ アンケート元データ

3-2 学部等

1) 集計の方針

- ① 学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。ただし、昨年度と科目選定方針が同じ、かつ1教員1科目実施を原則としている学部等（理学部、法学部、全学共通カリキュラム、学校・社会教育講座）は、学部等平均値について年度間比較を行う。
- ② 学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 科目開設学部等別の集計

① 回答者に関する集計

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、回答率を算出した。

② 設問項目別平均値

学部等、学科等、授業規模（回答者数）、学年別に設問項目別平均値を算出した。学部等平均値については、5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、昨年度と科目選定方針が同じ、かつ1教員1科目実施を原則としている学部等は、学部等平均値の年度間比較を行った。（学部等平均値は、資料編 pp.56-67 参照）

③ 設問項目間の相関係数

学部等別に設問項目間の相関係数を算出し、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」について、他の設問項目との関連をみた。

3) グループ集計

学部等が独自に設定した基準によりアンケート実施科目をグループ化し、設問ごとに5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した（pp.17-18 参照）。

2009年度前期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	開講曜日	月	担当者	立教 太郎	履修者数	238
科目名	開講時間	3	教室	5121	回答数	26

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	17 (65%)	5 (19%)	3 (12%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.46
2) この授業に積極的に参加した	9 (35%)	9 (35%)	6 (23%)	2 (8%)	0 (0%)	0	0	3.96
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4 (15%)	7 (27%)	6 (23%)	5 (19%)	4 (15%)	0	0	3.08
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4 (15%)	10 (38%)	8 (31%)	2 (8%)	2 (8%)	0	0	3.46
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立つ	8 (31%)	11 (42%)	6 (23%)	0 (0%)	1 (4%)	0	0	3.96
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	3 (12%)	2 (8%)	4 (15%)	5 (19%)	12 (46%)	0	0	2.19

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	10 (42%)	9 (38%)	4 (17%)	1 (4%)	0 (0%)	2	0	4.17
2) 各回の授業内容の量が適切だった	11 (42%)	12 (46%)	2 (8%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.27
3) 各回の授業のねらいは明確だった	9 (36%)	8 (32%)	6 (24%)	0 (0%)	2 (8%)	1	0	3.88
4) 各回の授業内容は明確だった	9 (35%)	11 (42%)	4 (15%)	1 (4%)	1 (4%)	0	0	4.00
5) 十分な静肅性が保たれた	20 (77%)	6 (23%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.77
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7 (27%)	12 (46%)	4 (15%)	3 (12%)	0 (0%)	0	0	3.88
7) 板書のしかたが適切だった	6 (23%)	7 (27%)	7 (27%)	2 (8%)	4 (15%)	0	0	3.35
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	4 (16%)	4 (16%)	9 (36%)	2 (8%)	6 (24%)	1	0	2.92
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	12 (46%)	6 (23%)	4 (15%)	4 (15%)	0 (0%)	0	0	4.00

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

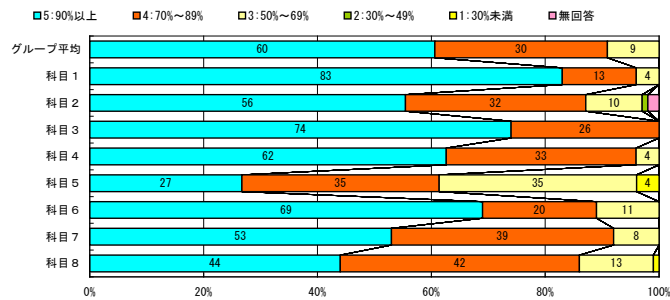
1) 自分にとって新しい考え方・発想	14 (54%)	7 (27%)	2 (8%)	3 (12%)	0 (0%)	0	0	4.23
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	13 (50%)	7 (27%)	4 (15%)	2 (8%)	0 (0%)	0	0	4.19
3) 自分で調べ、考える姿勢	7 (27%)	8 (31%)	10 (38%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	3.81
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	14 (54%)	6 (23%)	5 (19%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.27

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	13 (50%)	9 (35%)	2 (8%)	1 (4%)	1 (4%)	0	0	4.23
2) 授業全体の目標が明確だった	11 (42%)	8 (31%)	5 (19%)	0 (0%)	2 (8%)	0	0	4.00
3) 学問的興味をかきたてられた	13 (50%)	6 (23%)	6 (23%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.19
4) この授業を受けて満足した	12 (46%)	8 (31%)	2 (8%)	3 (12%)	1 (4%)	0	0	4.04

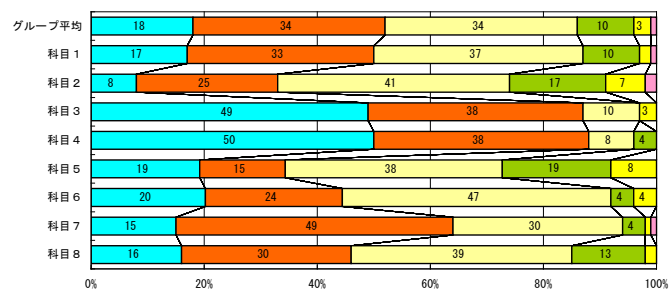
設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 無回答)

I-1 授業全体を通じての出席率



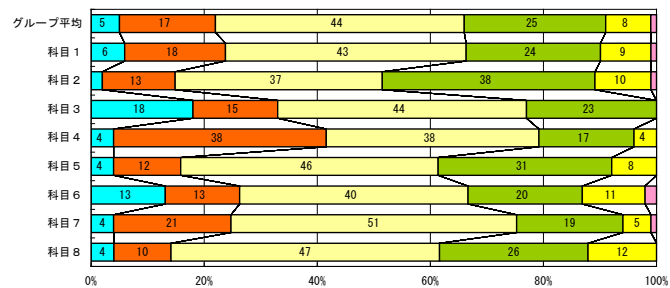
	回答者数	平均
グループ平均	621	4.5
科目1	127	4.8
科目2	104	4.5
科目3	39	4.7
科目4	24	4.6
科目5	26	3.8
科目6	45	4.6
科目7	150	4.5
科目8	106	4.3

I-2 この授業に積極的に参加した



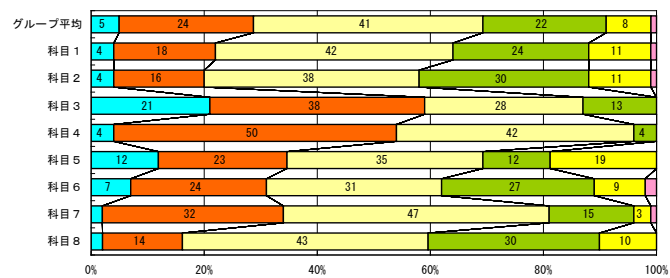
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.6
科目1	127	3.5
科目2	104	3.1
科目3	39	4.3
科目4	24	4.3
科目5	26	3.2
科目6	45	3.5
科目7	150	3.8
科目8	106	3.5

I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



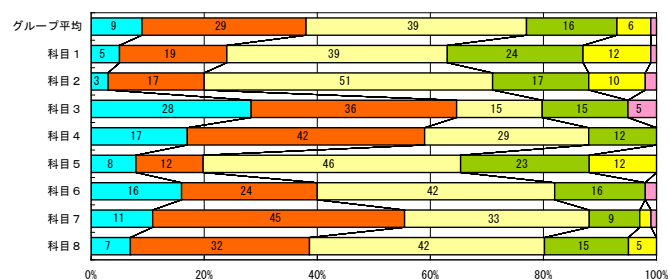
	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.9
科目2	104	2.6
科目3	39	3.3
科目4	24	3.2
科目5	26	2.7
科目6	45	3.0
科目7	150	3.0
科目8	106	2.7

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.8
科目2	104	2.7
科目3	39	3.7
科目4	24	3.5
科目5	26	3.0
科目6	45	2.9
科目7	150	3.1
科目8	106	2.7

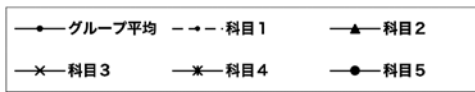
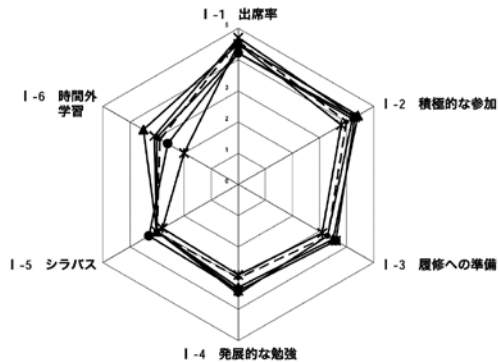
I-5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った



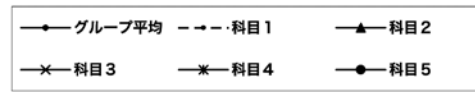
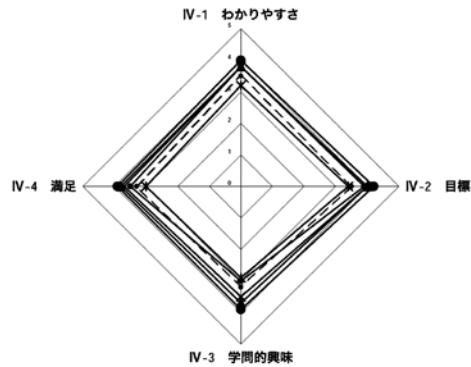
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.2
科目1	127	2.8
科目2	104	2.9
科目3	39	3.8
科目4	24	3.6
科目5	26	2.8
科目6	45	3.4
科目7	150	3.5
科目8	106	3.2

平均値のレーダーチャート

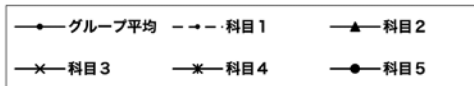
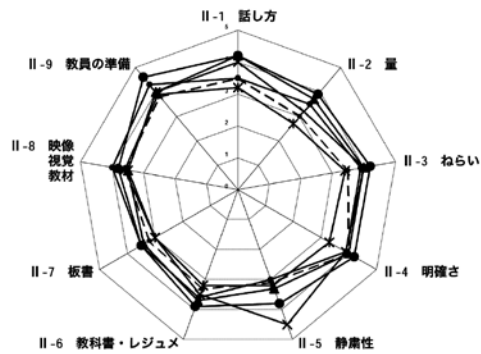
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



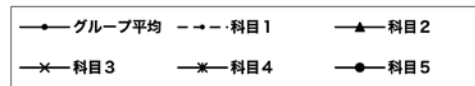
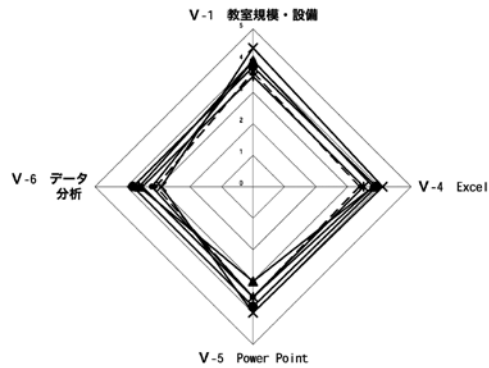
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



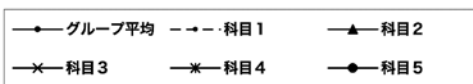
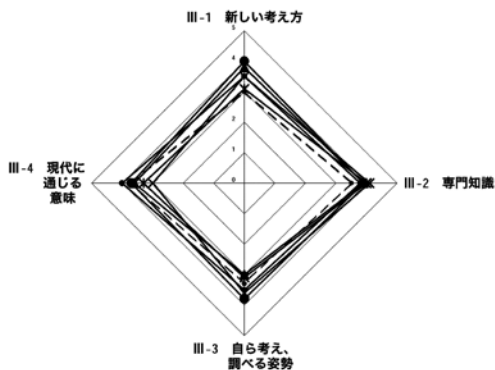
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



V. 学部等による設問（経済 情報処理系科目）



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いにそう思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

< I -1 >

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

< I -6 >

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果と各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等が執筆した。

学部等総評の構成は、下記の 2 つのうちのいずれかを原型とするか、もしくは両者を適宜組み合わせたものとした。

<グループ集計を実施しなかった学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」、「記述による評価に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見」、「否定的評価として多い意見」の集約）
5. 今後の改善に向けて

<グループ集計を実施した学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. グループ集計にみられる結果（「グループ集計の分類」、「学科や履修者数、同一名称科目等、グループ集計の分類により項目立て」）
4. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2009年度は昨年度同様以下の方針で科目を選定した。基本的に1年次、2年次の導入教育を主要な対象としている。全学的方針としては、複数担当者科目は除外することになったが、文学部ではそれ以前の調査との継続性を重視して複数担当者科目でもアンケートを実施した。

(1) 各学科・専修の導入（初年次教育）科目

- ① 1年次必修科目
- ② 1年次で履修可能な科目
- ③ 2年次必修科目
- ④ 2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

2. 集計データにみられる結果のまとめ

171の授業においてアンケートが実施された。調査対象授業の総履修者数は11,192名であり、その内7,565名が調査に回答した。回答率は67.59%である。これは全学平均回答率の56.99%よりも高い。アンケートに回答した学生の学年を調べると1年が3,583名、2年が2,266名、3年が1,078名、4年が488名、不明150名となり、科目選定方針に対応し、導入教育履修者が主要な調査対象となっている。3年次生も1,000名を越える学生が回答をしていることから、学部全体の動向を知る上で参考になる資料であることもわかる。

全体の各設問項目に対する解答者の平均値を見ると、「I 授業への取り組み方」では、I1の「出席率」が平均4.66、標準偏差0.61と、高い出席率意識を持ち、受講者のばらつきがあまりない。このことは多くの学生が「自分はほとんど出席をしていた」と考えていたことを示す。しかし、I6の「授業時間以外に学習した時間」をみると最頻値は1時間未満であり、0時間がそれに続く。両者を合わせると6割弱の学生が一時間程度も授業に関わる学習をしていないということになる。こうした傾向は基幹科目で特に著しい。学科専修の各平均値が2.15~3.48ポイントであるのに対して、基幹科目では1.96ポイントである。これは受講者数が151名以上になると学習時間が著しく下がることと連動していると考えられる。主として調査しているのは導入教育科目である。1年次、2年次生の多くが、このように「出席はするがそのための学習をしない」という意識を持っているとすれば、その後の大学における学習態度はどうなるのだろうか。このことを確認するために同データを学年別に確認してみる。回答者数が3年次、4年次と順に低くなっているのであくまでも参考データとしかならないが、1年次の平均学習時間が2.44ポイントであるのに対して、学年進行と共に次第に右下がりし、4年次には1.99ポイントとなる。このことは導入教育時に示される学習態度が学年進行と共に改善されることはなく、より悪くなっていく可能性があることを示唆している。上級学年のデータが少ないことや調査対象科目の特質にも左右されるのであくまでも学年間比較について現状では確定的なことは言えない。今後しっかりと推移を見ていく必要がある。

IIの「授業の進め方」についてみてみると、II9の「教員の授業の準備の周到さ」につい

て平均値が 4.09 と高い。ここから受講者は教員の授業準備に対しては高い評価を与えていることがわかる。これに対して、Ⅲの「授業から得るもの」という項目については、平均値が 4 点を超えるものはないが、特に、Ⅲ3 の「自分で調べ、考える姿勢」が 3.48 とともに低い点が気になる。Ⅰの結果と併せて考えると、よい授業を提供してもそれは履修者の学習態度を必ずしも変えることには連動していないことを意味するのかもしれない。このことは、Ⅳの「総合的な授業評価」(Ⅳ1「授業のわかりやすさ」、Ⅳ2「授業の目標の明確さ」、Ⅳ3「学問的興味」、Ⅳ4「授業への満足度」)についても 4 点以上の項目がないことにも関係していると考えられる。

文学部による設問では総じて教室の大きさも受講者数もほぼ適切だったという回答である。

3. グループ集計にみられる結果

グループ集計は昨年度に比べ、多くなり、23 のグループで行った。グループ 1 から 4 は 1 年次対象入門演習 (前期)、5~7 は 2 年次対象演習 (前期)、8 は基幹科目等、1 年次も履修可能な講義科目 (前期)、9、10 は各専修で必要と認めた文学講義 (前期)、11 は 1 年次で履修可能な古典語 (前期)、12 は音楽学演習と情報処理 (前期)、13 は 2 年次前期必修講義、14 は 3 年次演習、15、16 は 1 年次入門演習 (後期)、17~19 は演習 (後期)、20 と 21 は講義科目 (後期)、22 は情報処理、23 はフランス語表現演習である。全体の傾向としては昨年度とそれほど大きな違いはなく、昨年度提起された課題(1・2 年次演習受講者の予習復習時間の少なさ、基幹科目における私語等の問題)が解消されたとはいえない。新しく加えたグループについては今後データの蓄積を待って傾向を見る必要がある。

4. 今後の改善に向けて

今回は、学部の全体傾向を中心に総評した。その結果、学部全体の傾向として、履修者は授業にはよく出席するが、授業外での学習時間は非常に少ないことがわかった。他の項目とあわせて、履修者の意識を推察するならば、「自分が授業に良く出席しており、教員もよく授業を準備していることはわかっている。しかし、授業時間以外では関連する学習をしないため、十分理解できないこともある。そのため十分授業内容を咀嚼できていないこともある。」ということになる。大学における授業は既存の学力では対応できない理解を履修者に求め、それによって履修者の知的成長を促す側面があるが、そのための努力を多くの履修者が行わないため、授業の内容が十分消化されないことは問題である。教員の側の授業評価アンケートに対する総評においてもそのことを指摘する者が少なくない。

ただし、このアンケートはあくまでも意識調査であり、実際の行動がそのようになっていたのかどうかは不明である。また、「授業外の学習」が担当教員からの課題として与えられたものか、履修者が自主的に行ったものであるのかどうかはこの設問項目からはわからない。従って、ここに現れた数字が即「自主的な学習時間」を示すものであるとみなすことはできないことにも注意が必要である。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2009年度も2008年度に引き続いて、初年次学生に対する導入教育充実の観点から科目を選定した。具体的には、3学科共通の必修科目である経済学および会計ファイナンス学科の必修科目である簿記。また、3学科全てで共通選択科目1に配当された自動登録科目であり、共通シラバスを用い、授業の目標及び内容に共通性を有し、複数コマ展開されている基礎演習、情報処理入門、情報処理入門2の5科目を選定し、前期・後期を総計して70クラスで2009年度は授業評価アンケートを実施した。また、これらの科目およびクラスを9のグループに区分し、グループ集計を実施した。さらに全科目共通に「教室の規模・設備の適切性」について設問し、これに加えて基礎演習では「意見の積極的発言」、「レジュメ・レポートの作成」を、情報処理系科目では「表計算ソフトの活用」、「プレゼンテーションファイルの作成」、「データ分析」の習熟を問う経済学部独自の質問項目を追加した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2009年度調査では対象科目履修者総数は3,770名、これに対する回答者数は2,753名で、回答率は73.02%と比較的高い回答率を得た。今回の調査全体の集計結果を見ると過半数以上の項目で3.50以上の平均値を示し、総じて授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価を得られたと考えている。4.00を上回る項目と3.00を下回る項目が各々数項目あり、「教室の規模と設備の適切性」を問う項目が4.07を示したことを除けば、それらは全てIの学生の授業に対する取り組み方を問う設問に集中している。最も高い数値を示したのは、「授業全体を通しての出席率」(4.69)であり、2008年度に比較して0.02%と微増した。これは初年次生対象科目であり、かつ出席管理が容易な演習・実習系科目が大半であったことがその要因と考えられる。実際に2009年度調査では回答者の90%以上が1年次生であった。これに対し3.00を下回る設問は「シラバスの有用性」(2.93)、「授業時以外の学習時間」(2.63)の2項目であった。シラバスに関しては共通シラバスと実際の授業における個々の担当教員の授業の進め方に齟齬があったことを推測させる。この点は共通シラバスに基づき多数の教員が担当する授業では避けられない面もあるが、今後も授業内容のより一層の平準化を図る必要があり、すでに担当者間での授業情報の共有化を進める対応を開始している。また、「授業時以外の学習時間」が最も低い数値を示している。演習・実習系科目を中心に今回の科目選定を行ったことがその一因と考えられるが、学生の学習意識の向上や動機付けに未だ改善や工夫の余地があることが示されたと考えている。ただし、2008年度の回答では2.15の数値であったことを勘案すると、この点でも一定の改善は見られる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

初年次学生を対象として、共通シラバスに基づき複数コマ開講されている科目を、科目および学科に準じて、以下の9グループに分類した。

- ・グループ1：情報処理入門（前期／経済学科）
- ・グループ2：情報処理入門（前期／経済政策学科）
- ・グループ3：情報処理入門（前期／会計ファイナンス学科）

- ・グループ4：基礎演習（前期／経済学科）
- ・グループ5：基礎演習（前期／経済政策学科）
- ・グループ6：基礎演習（前期／会計ファイナンス学科）
- ・グループ7：経済学（後期／全学科）
- ・グループ8：簿記（後期／全学科）
- ・グループ9：情報処理入門2（後期／全学科）

3-2 情報処理入門（グループ1・2・3）

情報処理入門に関しては大半の設問項目で平均値は 3.5 以上であった。グループは学科で区分したが、3 グループとも各設問の数値はほぼ近似しており、学科による差異はほとんどないと判断する。また、各グループにおける担当者別の数値も近似しており、クラスにより極端な差異は見出せず、授業内容と教育効果は科目全体として平準的に達成できていると考える。科目に固有の設問（V4、V5、V6）の数値が平均して 3.7 程度であるが、この項目の数値をいかに上昇させるかが課題であろう。

3-3 基礎演習（グループ4・5・6）

基礎演習についても大半の設問項目で平均値は 3.5 以上であった。ここでも学科および担当者による有意な差異は見出せない。共通テキスト『基礎演習ハンドブック』の利用や担当者間での授業情報の共有化の作業がある程度効果を発揮したものと考えている。基礎演習についても特に科目に固有の設問（V2、V3）の数値をいかに上昇させるかが今後の課題であろう。

3-4 経済学（グループ7）

経済学は他の科目と異なり必修の講義科目であるためか、総じて学生の授業に対する満足度は高くない。多くの設問項目で3ポイント前半の数値が示され、2ポイント台の数値も散見される。科目内容やカリキュラム上の位置付けの点を勘案するとしても、授業方法等の工夫と改善の必要性を今回のアンケート結果は示している。さらにクラスによる数値の差異が相対的に大きく、これが科目担当者の授業内容や方法に起因するかどうか個別に確認し対応することが必要と判断している。

3-5 簿記（グループ8）

簿記は他の実習・演習系科目である情報処理入門・基礎演習に比べると総体的に数値は低い。科目の特性やクラスサイズの違いがあり単純な比較はできないが、科目全体としては改善の余地がある。簿記でも問題なのは授業内容や方法に関する設問でクラスにより極端な差異が生じていることである。経済学と同様に簿記においてもその点の確認と対応が必要と認識している。

3-6 情報処理入門2（グループ9）

情報処理入門2は授業方法や内容、その効果に関する設問項目で総じて高い数値を達成できている。項目によってはクラスでやや差異が見られるが、設問全体を通じて見れ

ば有意な差異とは言い難い。教育効果を示す学部独自項目で前期開講の情報処理入門に比して数値が全体として上昇傾向が見られる点は評価できる点である。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

板書や静肅性、話し方などについて改善を求める意見が多く、ほとんどの教員が学生からの指摘を真摯に受けとめ、次年度に向けて努力する姿勢を示している。学部としても担当教員の打ち合わせ会を設定するなど授業方法や内容の平準化と改善に向けて努力をしている。担当教員の個々の努力と同時にこうした学部としての改善に向けた努力とサポート体制の整備が重要であると認識している。

5. 今後の改善に向けて

複数コマ開講されている基礎科目については、授業の進度、内容、試験の難易度等に関して担当教員間の調整が不可欠である。定期的にミーティングを開催し、情報の共有化や意見交換を行なう必要がある。他面で設問内容と実際の授業方法との間のギャップや教室・設備の適切性など学部自体の努力を超えた問題もある。特に演習授業における教室の狭隘問題は例年学生のみならず担当教員からも改善が求められる問題であり、大学として早急に対応することを求めたい。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

科目の選定については、統計的な推移を観察することを意図して2009年度も例年通りとしている。ここでのポイントは、2008年度の評価平均値が2007年度に比してほぼ全ての項目で有意に低下した事態に対する教員側の授業内容・展開に対する改善努力が、結果として2009年度の評価にどのように反映されたかを確認したい、ということにある。また、理学部独自の項目として2009年度から、高校授業からのギャップに戸惑う学生の意識を間接的に探るために「(1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた」という問を新設した(V2)。さらにもう1つ、学生の自習意欲を図る狙いで「(必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった」という問も加えた(V3)。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 2008年度との比較

既述のように2007年度と比べて2008年度の評価結果は有意な低下が見られ、その分析が2008年度の報告書でも示されていた。その分析では、学生の質の変化と回答者数の間の齟齬が低評価の理由の1つとなっていたが、2009年度では新設した項目群Vを除くと回答者数に大きな変化がないにもかかわらず、評価値は全ての項目で上昇する好結果となった。上昇の幅としては0.2~0.3程度の顕著な値を示す項目が多数あり、総じて2007年度の評価値をも上回っていると言える。細かな分析は後述するが、教員側の努力が授業の改善につながり、それが正当に評価されたと考えてよいだろう。これは、設問項目間の相関分析の指標値からも裏打ちされる。

2-2 学年間の比較

2008年度は1年次生の回答者数が1498で、2年次と3年次の各々1266と1030と比べて有意に多かった。2009年度は、2年次が1512、3年次の1100となって、そのまま繰り上がった感がある。他方、新しい1年次の回答者数は1274で平年並みと言える。こうしたことから、2009年度の2年次生の評価が気になるところだが、1年/3年次生と比較して明確に低い項目(例えばI2, II3, III1, IV1, IV2, IV4)がある一方で、高い項目(I5, I6, II5, II6, V2)もあって興味深い。高低のいずれからやや受身的な姿勢がみて取れるが、I6やII6からは1年間の大学での学習を通じて芽生えたであろう自助努力的な要素も出てきていることが分かる。3年次生は大学の授業に慣れて自習でカバーしている部分があり、これに比べれば1年次生はレジュメや資料配布といった教科書以外の教材に対する不慣れさもあるようである(II6, II8など)。

2-3 学科間の比較

2008年度と同様、数学科と生命理学科の評価が高い。数学科が高めとなるのは、学生数が相対的に少なく、また授業形態も実習・ゼミ的な進行が多いことが背景にあると思われる。生命理学科についても、学生数が物理学科や化学科よりも若干少ないこともあるが、所見票などからは教員側の取り組みが学生から肯定的に評価されている様子が見

えてくる（Ⅱ9 の突出した値は端的な指標であろう）。他方、化学科については回答者数が最も多いものの残念ながら低い評価となってしまうている。項目で見ると、この授業から得ることができたこと」を問うⅢ系の項目がよくない点、またV1の学生とのコミュニケーション評価が優れない点などは気になる。化学科の2009年度の結果は、前述した2008年度の分析にある学生の質と回答者数との逆相関をそのまま引きずってしまった感もあるが、2010年度以降に改善すべき課題として教員に認識されるべきではあるだろう。なお、物理学科は科目の選定が他学科とは異なるために解釈はやや難しいが、化学科との比較では項目群Ⅲなどでは優位に見える。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生からの評価結果については、多くの教員が概ね妥当なものとして判断しているようであり、授業の改善に役立っていることが分かる。一方、学生側の意識ないしは学力と、教員側の意図ないし内容設定がすれ違っている例も見られる。教員が挙げた学生の方の問題としては、私語の多さ、自習時間の不足、基礎学力の低下などがあり、2008年度報告と同様である。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

板書と声の聞き取りに関して改善を求めるコメントが比較的多くみられる。学生に対してより分かりやすい授業を提供する上で、板書の仕方やマイクの使用などでカバーできる点も多く、教員側も対応していくべきであり、前者では今後は画像ファイルなどでデータ記録可能な電子黒板とそれを受信可能な学生用情報端末などの導入などが今後検討されてもいいかもしれない。内容に関するコメントでは、評価の仕方や難度についてのクレームもみられるが、肯定的なものが多いようで、学習意識・意欲の高い学生がマークシート項目だけでなく記述式の設問に答えている状況が映し出されていると判断される。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

総じて、改善について真摯に取り組む教員の姿勢がみえている。内容的には科目毎の差はあるが、授業内容の改良、プレゼンテーション機器の使用、私語の抑制、学習意欲の向上、などに大別される。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

所見票から逆射影的に読み解いてみると、好意的コメントの内訳として以下の4項目が浮かびあがってくる。(1) レジюмеなどの補助教材による理解促進と内容補足、(2) 演習による少人数教育、(3) 読みやすい板書（ないしパワーポイント）、(4) 静粛性の確保。学科別に見ると、数学科では(2)に関連した記載が目立っていることも、全体を通じての高い評価値に連動したものと受け取れる。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

上と同様に分析してみると、(1) 内容量の過剰・レベル難度の高設定、(2) 板書量の過剰と読みにくさ、(3) 聞き取りにくさ(声が通らない)、(4) 私語、(5) 授業時間設定、などが出てくる。4-1とは相補的な部分がほとんどであるが、(5)については実験・実習授業の時間配分、あるいは池袋地区の教室使用度が2-4時限は高水準で推移していることから、現実的にはなかなか対応が困難ではある。

5. 今後の改善に向けて

既に述べているように、2009年度は2008年度で低下した評価値が全ての項目で改善され、改善度も2007年度を上回るものも多数あったことは、たいへんに好ましい結果であり、喜ばしい。これまで数学科と生命理学科は高めで推移してきたが、2009年度もその傾向は続いており、特に后者では評価値が上がっていることは特記できよう。一方で、必修科目が他学部に比して多く、実験・実習系の科目も多い理学部の特殊事情の観点からは、アンケート評価値の短期的な変動に惑うことなく、教員側が授業改善への努力を続け、質的に年々変化している学生に現実的に対応していく適応力を持つべきとも言える。

授業の改善において、分かりやすさを求めるあまり、内容を過度に絞り込んだり、レベルを下げることは本末転倒であり、4年次の卒業段階での「学士力」を担保するような長期的な視野に立ったカリキュラムづくり、科目展開が必要であることは言うまでもない。評価結果の経年変動の-marginも考慮した上で、基礎的理解からの骨太の学習力の確保を図るようすべきである。さらに、各学科がカバーする学問分野の年々の進化・深化に応じた柔軟性と発展性を持った「おもしろさ」をいかに両立させて学生に伝えるべきか、教員側も試行を続けていかななくてはならないと思われる。

4-4 社会学部

1. 科目選定のねらい

2009年度の授業評価アンケート対象科目の選定に際し、社会学部では2007年度からの方針を踏襲し、以下のような方針を立てた。

- ① 必修、選択必修の講義科目を原則としてすべて実施する。
- ② 「講義科目1教員、1科目」になるように選定する。
- ③ 産業関係学科の科目は実施しない。

以上の選定方針は、現行の授業評価アンケートの主たる目的が「各教員が行う授業の仕方や内容の改善」に置かれていることに対応しているが、それに学部及び学科のカリキュラムを点検する観点を加味し、必修・選択必修科目を原則として実施対象とした。必修および選択必修科目群は、学部教育カリキュラムの基盤をなす科目と位置づけられ、それらの多くが導入期にあたる初年度、2年次における履修が想定されている。したがって、これらの科目に対する学生の評価をみておくことは、今後の基礎教育の改善に向けた意義が認められるものと考えられる。また、2006年度からの学部再編において学生募集を停止した学科の開設科目については、授業評価を行わないことにした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

従来、大規模授業であるほど満足度や評価が低下する傾向が指摘されてきたが、今回の結果では、顕著といえる傾向ではなかった。授業規模別に評価において相関が見られるのは、「十分な静肅性が保たれたか」という設問であった。50名以下では、4.26という高い評価であるものの、151名以上の授業では、3.44と低い。また、「51名から100名」では、3.73、「101名から150名」で3.35であった。

しかし、カテゴリⅢ「この授業から得るものができたこと」の四つの設問では、評価の差異は、0.1ポイント前後であり、有意な差異とみることが難しい。また、カテゴリⅣの「総合的満足度の評価」においても、同じく授業規模別の差異はほとんど認められない。こうした結果は、『2009年度集計結果（社会学部）』の「5. 設問項目間の相関」（表9）でも指摘されているように、「授業の満足度」と「授業の静肅性」との関連が弱いこととも整合しているように思われる。

2-2 学年別

授業出席率は、学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼすべての評価においては、学年が進むにつれて上昇している傾向が見られた。恐らく選択の自主性の度合い、つまり1年生の場合、必修科目が多いことが関連しているという解釈もあり得るが、他方では、大学の授業への慣れの問題も関連しているかもしれない。（これについては、他学部の集計結果との比較が望まれよう。）

さらにカテゴリⅢの「この授業から得るものができたこと」の各設問での学年別の集計結果も注目し値する。「自分にとって新しい考え方・発想」の設問では、1年生が3.62であったのに対し、学年が進むについて、3.74（2年生）、3.83（3年生）、3.96（4年生）と、高い評価になっている。

2-3 学科別

「授業への取り組み方」においては、学科間差異はほぼ見られないといってよい。しかし、評価が行われた各カテゴリーにおいては、3学科揃って概ね良好な水準であったものの、現代文化学科の授業への評価が高い傾向が見られた。

カテゴリーⅣの「総合的な満足度」の「わかりやすさ」では、現代文化学科が 3.87、社会学科 3.64、メディア社会学科 3.64 の順であった。「授業全体の目標設定」についても、現代文化学科 (3.84)、社会学科 (3.71)、メディア社会学科 (3.65) の順であり、「学問的興味をかき立てられたか」の設問でも、現代文化学科 3.74 であるのに対し、社会学科、メディア社会学科はいずれも 3.59 であった。最後に「この授業を受けて満足したか」の設問でも、社会学科とメディア社会学科では、3.66 と 3.63 であったのに対し、現代文化学科では、3.81 と最も高かった。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

2007 年度に開始された「グループ集計」において用いられたグループ分けを継続して依頼している。3 学科別に「必修科目・選択必修科目」および「選択科目」と分け、それぞれを前期・後期別に集計した。

3-2 各学科、必修・選択必修科目、選択科目による授業評価の傾向

3 学科の各グループ (科目群) に対する評価の傾向にはほとんど相違がないといっていだらう。ただし、「総合的にみて、この授業は・・・」という設問カテゴリーの学科別平均値をみると、現代文化学科がやや高い水準をみせている。現代文化学科 3.81、社会学科 3.65、メディア社会学科 3.59 の順であった。なお、2-3 の「学科別評価の値」と若干の差が見られるが、その理由は、上記の平均値 (社会学部集計結果の表 8) は、科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出されているためであると推察される。

また、必修・選択必修科目 (学部全体) の平均値 (3.61) より、選択科目のそれ (3.76) がやや高くなっており、学年別の平均値で確認された「学年が進行するにつれて評価が高くなる傾向」との整合性も確認された。さらに、学科別にみると、現代文化学科の必修・選択必修科目の評価が 3.81 であったのに対し、社会学科 3.6、メディア社会学科 3.42 であり、選択科目群の学科別の平均値においても、現代文化学科 3.81、メディア社会学科 3.76、社会学科 3.75 の順であった。

4. 今後の改善に向けて

今回の結果は、いくつかの点で示唆点がある。第一に、小規模授業ほど満足度や評価が高い傾向が認められるものの、その相関は昨年度までの結果と比べて弱くなっていることがある。次に、必修・選択必修科目の評価が相対的に低くなっていること、また低学年の評価が相対的に低くなっていることに注目し、新入生向けの「大学の授業への導入支援策」を検討する必要がある。

4-5 法学部

1. 科目選択方針とそのねらい

従来どおり専門講義科目を対象とした。大人数科目が多い法学部としては、これらの科目における教育が容易ではないことを考慮して重視している。一方で、演習科目は少人数でアンケート調査が行いにくいという事情もある。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

2005年度以来、3年間連続して平均値が上昇してきたが、今年度もこの傾向を継続しており、すべての設問項目の平均値で前年度を上回っている。各教員の努力の成果であるとともに、学生による授業アンケートおよび教員による改善策の立案、提示の成果であろう。

前年度と比べ0.05ポイント以上上昇した項目は、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」（この項は前回の大幅な減少を回復した）、Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」、Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」、Ⅱ6「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」、Ⅱ8「映像視覚資料教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった」（0.14ポイントの最高の上昇率であった）、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」、Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」、Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」、Ⅳ1「わかりやすい授業だった」、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」、Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」、Ⅳ4「この授業を受けて満足した」と多かった。授業において様々な工夫がなされ、学生の満足につながっていることがうかがわれる。

従来と同様に、他学部と比べて回答率が極端に低い（35.80、全学平均値は56.99）ことが目立っている。その背景としては、法学部のカリキュラムに必修科目が無いことや、大教室での授業が多いために出席を取らない（出席率を成績評価にカウントすると、熱意の乏しい学生たちによる私語が多くなるために敢えて出席を取らないというジレンマもある）、ミニテストもあまり行わないなどの事情がある。とはいえ、学部としてはこのような状態が内包している問題をあらためて議論する必要があると思われる。Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」が連続して上昇していることは評価されるべきではあるものの、このように出席率が低いことを考えると、割り引いて考える必要があるだろう。

設問項目別の平均値を見ると、平均値3以下の項目がⅠ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（1時間そこそこ）であった（Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」のポイントが低いことと関連があるだろう）。いずれも学生の授業への取り組みに関するものであり、受動的な学習態度の結果だといえる。大人数授業であることもその理由の一つであろうが、教員としてはそれを前提にさらに工夫が必要であろう。

授業規模別平均値を見ると、150名以上になると各項目の平均値が下がることは前年と変わらない。とくに、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」の項目は50名以下と較べると1ポイント以上低いことが際立っており、100名程度までが効果的な授業であることを示している。

学年別平均値を見ると、学年が上がるごとに平均値が上昇するという傾向がみられるこ

とはこれまでと同様である。大学の授業に慣れてきたことであろうが、知識が蓄積されて行くにつれて理解度が深まっている結果だと考えることもできよう。ただ、I1「授業全体を通じての出席率」で4年次生が前年度と同様に0.2ポイント近く落ちていることが気にかかる。就職活動による影響だと思われるが、せつかく理解力が深まってきた4年次生の時点であるだけに惜まれる。

設問項目間の相関も興味深い。詳しくは表9 相関係数表を参照していただきたいが、授業に対する満足度に関連するのは、II1「聞きやすい話し方だった」、II3「各回の授業のねらいは明確だった」、II4「各回の授業内容は明確だった」であった。

3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

概ね肯定的であるが、一部に厳しい批判も散見された。学生の評価が集中しているのは、静粛性が保たれているか、授業進捗のテンポが適切か、授業内容が分かりやすいか、重点箇所が明確に指摘されているか、声が聞き取りやすいか、板書が丁寧か、などである。本年度は、レジュメの配布、パワーポイントやビデオの使用に対する評価が高かった（データにも表れている）。一方で、シラバスの内容と一致していないという苦情があった。また、2コマ連続の授業はつらいという声がいくつかあった。

また、授業や教育に対する教員の熱意や学生に対する思いやりなどについても敏感に反応している。また、教室の冷房が効きすぎて困るという苦情が少なからずあったが、昨年度も指摘されており、担当部局に改善を求めたい。

4. 担当教員からの所見表に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほとんどの教員が評価結果を真摯に受け止め、今後の授業の参考にしたいとしている。授業評価制度に対する積極的な評価が定着していると思われる。

一方的な講義の限界を越えるために、マイクを学生に渡して意見を述べさせることによって、双方向的な授業を作りだそうという試みが学生に好評であるという報告があった。

映像視覚教材の使用については、有効であるという意見と、一方でノートしにくい、大教室では後方では良く見えないなど、昨年同様に今年も教員の間意見の差異がある。

4-2 「記述による評価欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の批判的評価や要望に対して積極的に改善を約束する回答がほとんどであった。昨年同様、「早口」を改善するとの回答がいくつか見られた。また、レジュメの配布によって補う方法は学生にも好評であることはデータからも読み取れる。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員が、学生の評価に対応した具体的な改善策を示している。自主的な学習を促すことの難しさは、昨年同様、多くの教員にとって悩みの種である。多人数の講義が多いがゆえに、解決策を見出すのも容易ではないが、「宿題」や「練習問題」を課したいという意見があった。

大教室が使いづらいという問題点について、教室後方にもモニターを設置して改善を図るべきだという意見があった。

5. 今後の授業改善に向けた課題の提示

テクニカルな問題の多くは、大人数教育に起因するものが少なくない。大人数教育は私学の宿命ともいえるが、教員はこの問題を改善するために多くの努力を払っているといえる。今後も知恵をしばる一方で、大教室のインフラの積極的な改善を当局に求めたい。

私見であるが、授業評価アンケートによる改善は望ましく続行すべきであるが、分かりやすい＝消化しやすい授業は、学生の消化力の減退（その結果の一つは積極的自主的な学習態度の欠如であるかもしれない）につながることに注意すべきではないだろうか。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、例年通り、2~4年次演習を除く全ての科目において実施した。全科目を対象に実施した理由は以下の2点にある。第1に、授業の質を高めるために、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらすと考えているからである。第2に、現在、学部として取り組んでいる国際認証評価取得のために、全科目を対象とした授業評価アンケートの実施が望ましいと考えられるからである。このため、可能であれば、今後も、演習を除く全科目を対象に授業評価アンケートを実施していきたいと考えている。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

授業の総合的評価を示す「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきたてられた」、「この授業を受けて満足した」の4項目については、いずれも3.5点以上となっており、学生から一定の評価を得ているといえよう。ただし、学部として、現状に満足せず、今後、学生からより高い評価を得られるように努力していく必要はある。

授業から得られたものを示す4項目についても、いずれも3.5点以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が最も高く3.8点で、「自分で調べ、考える姿勢」が最も低く3.6点であった。ただし、演習系科目のうち、グループ集計を行った基礎演習、BL1、BL2では、いずれも「自分で調べ、考える姿勢」において4.0点を超えていた。このことから、講義系科目において、当該項目の評価が低かったと考えられる。確かに、講義系の科目においてこのような姿勢を養うのは難しい。しかし、自分で調べたり考えたりする姿勢を養うのは、大学教育における重要な役割の一つである。講義系科目においても、このような姿勢を養成するための工夫が求められる。

授業の進め方についても、「板書のしかたが適切だった」を除いていずれも3.5点以上であり、一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた」については、4.1点の評価を得ている。これらのことから、授業の進め方についても、学生から一定の評価を得ているといえよう。一方で、「十分な静粛性が保たれた」が3.6点と、それほど低くないことは意外であった。ただし、静粛性については、少人数講義科目や演習系科目と大人数講義科目との間に大きな違いがあり、大人数講義科目では、もっと値が低いと考えられる。自由記述意見を見ても、私語の多さは多く指摘されており、また、教員間でも、私語の多さについて共通に認識されている。個別の教員による取り組みもさることながら、学部全体として、私語を減らす取り組みを行っていく必要がある。

学生側の授業に対する取り組みを示す5項目（「シラバスは受講に役立った」は除く）については、「授業全体を通じての出席率」および「この授業に積極的に参加した」はそれぞれ高い数値を示したが、それ以外の項目については、いずれも3.5点未満と低かった。各教員が連携して、授業時間外の学習を促進するような対策を打っていく必要がある。また、「シラバスは受講に役立った」についても、3.3点と低い値を示している。シラバスの記述については字数に限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていく努力が必要となる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経営学部では、基礎演習、BL1、BL2の3科目についてグループ集計を行った。理由は、これらの科目が複数コマ展開されており、それぞれ担当教員は違うものの、同一のフォーマットによって開講されているからである。従って、これらの科目については、担当者ごとのばらつきが低いことが望ましいと考えている。

3-2 基礎演習

総合的評価の4項目は、16クラスの平均値がいずれも4.0点を超過しており、高い評価を受けている。「この授業を受けて満足した」については、3クラスを除き、いずれも4.0を超過しており、3クラス中2クラスは、3.9点であった。これらのことから、クラス間のばらつきもそれほど大きくないといえよう。

3-3 BL1

「この授業を受けて満足した」の8クラスの平均値が3.8点であった。決して低い数値ではないが、基礎演習と比較すると若干低い。また、最も高いクラスでは4.5点であったが、最も低いクラスでは3.5点であり、クラス間のばらつきも大きい。BL1は、経営学科の学生にとって自動登録科目であり、また、国際経営学科の学生も多く履修している。さらに言えば、経営学部や経営学科にとって重要な位置づけをしめる科目である。従って、基礎演習と比較して、満足度が低かったり、クラス間に大きなばらつきが見られたりすることは問題である。原因を明らかにして、適切な対策を打っていく必要がある。

3-4 BL2

総合的評価の4項目中「学問的評価をかきたてられた」(3.9点)を除き4.0点を超過しており、一定の評価を得ているといえよう。また、4項目中の「この授業を受けて満足した」については、一番高いクラスで4.2点であり、一番低いクラスで3.8点であった。このことから、クラス間のばらつきもそれほど大きくないといえる。

4. 今後の改善に向けて

板書の仕方については、相対的に評価点も低く、「記述による評価」欄においても否定的な評価が多かった。この点については、改善していく必要がある。また、「記述による評価」欄の否定的な意見として、内容が難しく理解が不足している点が上げられた。この点については、説明の仕方、教材の使い方、進行速度などの工夫により、理解を促進する努力をしていく必要がある。

その一方で、学生側の授業に望む態度についても改善が求められる。この点についても、教員としていかに改善を促すかについて検討していく必要がある。特に、私語の多さについては、大きな問題であると認識している。取り組みとして、教員全員が当該問題を認識し、学部全体で、授業中に私語が出来ないような雰囲気を作り上げようとしている。具体的には、新入生と学部長の懇談会の中で、学部長より、私語の問題について指摘したり、

新入生向けガイダンスにおいて、厳しく指導したりしている。また、各教員も、それぞれの授業において、厳しく取り締まるように努力している。しかしながら、現在のところ、これらの努力が実を結んでいるとは言い難い。今後も、これらの対策を継続しつつ、対策の見直しや新しい対策の導入を含めて、検討を続けていくことが求められる。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

2009年度は学部開設2年目であるので、全ての科目について授業評価アンケートを実施することはしなかった。今年度実施したのは以下の3種類の科目であるが、全て異文化コミュニケーション学部基礎カリキュラムの中核を成す必修科目である。

基礎演習1(1年次前期)

基礎演習2(1年次後期)

Cultural Exchange(2年次前期)

上記は全て複数コマ展開科目である。統一カリキュラム、統一シラバスを採用している。また教授法、授業運営等に関しても、可能な限り統一を図っている。

これらの科目に関して、授業評価アンケートで得られた結果のグループ集計を行った。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

1、2次生が対象であるが、昨年と同様に回答率(93.37%)は非常に高かった。他学部と比較しても傑出した数字である。これは学生の真摯な勉学態度を表すものと解釈できる。

I. この授業へのあなたの取り組みについて

出席率は非常に高く、また積極的に授業に参加しているが、「授業の十分な準備(3.69)」、「発展的な学習(3.54)」となるとかなり低下する。また、統一カリキュラム、統一シラバスによる科目であるため、シラバスに掲載できる内容には限りがあり、それだけでは学生の役にはたたなかったようである。

II. この授業の進め方は・・・

ほぼ平均的な評価の数値であるが、最も高い評価が「教員の授業の準備(4.19)」及び「聞きやすい話し方(4.18)」であるというのは心強い。学生が全体として、自分たちが受けている教育の質を正当に評価していることの表れであろう。

III. この授業から得るものができたこと

全般的に高い評価である。最も高かったのが「自分にとって新しい考え方・発想(4.27)」の項目で、それに自分で調べ、考える姿勢(4.17)」が続く。これらの必修科目の存在意義が評価結果に裏打ちされていると思われる。

IV. 総合的にみて、この授業は・・・

完璧ではないが、全体として満足できる結果であると思われる。あえて言えば、「学問的興味」の評価(3.71)が他と比べて少し低かった。これは時間的な制約があったため、学生に対し学問的おもしろさを十分に伝えきれていなかったためと思われる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

必修科目について、次の4グループに分類して集計を行った。

グループ1: 基礎演習1(前期、共通シラバス、複数コマ展開)

グループ2: Cultural Exchange(前期、共通シラバス、複数コマ展開)

グループ3: 基礎演習2(後期、共通シラバス、複数コマ展開)

グループ4: グループ1と3の科目(前後期の基礎演習の総計)

3-2 基礎演習1について

昨年度の基礎演習のカリキュラムは内容が盛りだくさん過ぎて、学生がやや消化不良気味のところがあつた。今年度のカリキュラムは基本的には昨年度と同じ構成であつたが、目標を明確にし、かつ通常授業とワークショップの連携を図つた。また通常授業においては、学生の自主的な発信能力を高めるため、「協同学習」という新教授法が導入された。その結果が学生による授業評価に現れていると思われる。結果を見ると、全体として非常に評価が高く、また安定した数値である。授業のねらい、内容、わかりやすさ、目標、満足度等はほぼ同じ評価である。平均値が非常に高いものが二つあり、一つは教員による授業の準備、もう一つが新しい考え方・発想である。教員が努力したこと、そして学生がこの授業から何かを学んだことを裏付けている。また、担当教員間の評価のバラつきに関しては、全体としてそれほど大きな違いではなかつた。

3-3 Cultural Exchangeについて

この科目の主旨は実践的な異文化対応能力を涵養することである。初年度のカリキュラムであるが、授業のねらい、内容、わかりやすさ、目標、満足度とも、平均値だけを見ると、まずまずの結果であると言える。しかし担当教員によって評価に大きなバラつきが見られた。これは、授業運営がうまくいったクラスと、そうでないクラスがあつたということである。おそらくその最大の理由はこの科目の目標と方法論がまだ未確定であることによると思われる。そのため各担当者は独自の裁量で模索せざるを得なかつたと思われる。またこの科目は語学コースではないが、実際には授業はほとんど英語で行われた。しかし学生の英語力に大きなバラつきがあり、外国人留学生にも参加してもらふという前提であるので、こうした状況での授業運営については通常の授業とは異なる工夫が必要であらう。意欲的な科目であるが、十分な教育効果を生み出すためには、以上の問題点が解決されるべきであると思われる。

3-4 基礎演習2について

基礎演習2でも、基本的には昨年度と同様のカリキュラムを展開した。学生にとってふさわしいと思われる一冊の本を読み、それに基づいて様々なテーマを設定し、授業を展開した。昨年度はこの方法を単調と考える学生がいて、十全な成果を上げたとは言えなかつたが、今年度はその点を改善して、授業内容にバラエティを持たせ、学生が興味を持って課題に取り組めるように工夫した。また基礎演習1で導入した、新教授法を継続して実施した。その結果昨年度よりはかなりよい評価が得られたようである。担当者間の評価のバラつきは基礎演習1とほぼ同じであつた。

4. 今後の改善に向けて

全般的に見て、基礎演習、Cultural Exchangeの両科目とも、授業評価アンケートの集計結果を分析する限りでは、かなりよい評価を受けていると思われる。始めにその点を指摘しなければならない。

しかし個別に見るといくつかの改善すべき点があるように思われる。

基礎演習は濃密なカリキュラム内容であるが、その実施に際しては、やはり時間的制約

が最大の障害であると思われる。それを和らげるには、何らかの手立てが必要になるが、限られた時間で十全な教育効果を上げるためには、重点的な目標を設定してカリキュラムにメリハリを付け、学生が目的意識を持って課題に取り組める工夫が必要であろうと思われる。

Cultural Exchange に関しては、科目目標をより厳密に設定して定義し、カリキュラムを明確化すること。また授業運営、授業活動をもし英語でやるとするのなら、英語によるコミュニケーション、あるいはディスカッションが可能なクラス分けが不可欠であろう。さらには外国人留学生の参加をどう位置付けるのかを考えなければならない。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を選定した。選定した科目数は39である。

- (1) 2010年度新カリキュラムにおいて学部・学科の基本的授業科目と位置付けられている講義系授業科目を中心にアンケートの対象とする。
- (2) 専任教員に関しては、原則として1つ、担当授業科目をアンケートの対象とする。
- (3) 1人の教員に関して1つの授業科目のみをアンケートの対象とする。
- (4) 「***1」「***2」といったペア科目については、基本的な内容の「***1」の方をアンケートの対象とする。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

全体として概ね良好で高い満足度が得られている。

平均値の低い項目(3未満)は「Ⅰ この授業へのあなたの取り組み方について・・・」にのみ散見され、このことは授業の進め方や内容については比較的満足度が高いものの、受講学生が自らの主体的学習活動の不足に自省的であることを示し、また、授業が必ずしも受講学生の主体的・発展的学習活動を要請したり促進したりするものにはなっていないことを物語っているとも言える。今年度の授業評価アンケートが講義系授業科目、殊に学部・学科の基本的授業科目を中心的対象としていることの、或る程度は必然的な結果とも言えるが、たとえば「Ⅰ6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(1.91)は注視すべき低さである。以上のことは、概ね満足度の高い授業の進め方や内容の中にあつて「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢」(3.16)の評価が比較的低いこととも符合する。

「Ⅱ この授業の進め方は・・・」において平均値の低い項目は「Ⅱ7 板書のしかたが適切だった」(3.27)である。板書は「Ⅱ6」内の授業レジュメ、「Ⅱ8」のパワーポイントと重複する部分も多く、適当かつ有効な使用に関する工夫と検討が必要であろう。

なお、受講学生の多い講義系授業科目において問題となりやすい「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」(3.64)に関しては、他の項目と比べるとやや低めの評価と言える。

3. 授業評価に対する担当教員の所見

若干の授業科目において、学生による評価と教員自身の意識との間の差に関する指摘が見られるが、例年同様、ほぼすべての教員が学生からの授業評価が概ね良好であったと受け止めており、さらなる授業改善への意欲を示している。

ただし、多くの教員が、受講学生自身による評価以上に、受け身の受講姿勢を指摘しており、それ故に、主体的学習を促進するための工夫・努力の必要性に触れている。また、受講学生数の多い授業においては、教員から授業運営上の困難が幾つか指摘されており、たとえば学生による「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」の評価は低くなくても、実際には私語が目立つことを多くの教員が指摘している。このように授業環境に関しては、学生と教員との間に意識や評価の差があるものと考えられる。

4. 記述による評価に対する担当教員の所見

学生から板書（ノート）、レジュメ、パワーポイント、映像等、教材や資料の提示の仕方に関する記述評価（要望等）が多く、これらに関する教員の所見の多くは自らのさらなる工夫・努力の必要性に触れるものである。ただし、ノートの取り方等、学生自身の努力の必要性を指摘する所見も認められる。なお、大教室において、座席によってはパワーポイントや映像が見えにくい場合があり、教室の設備環境の不具合に関する所見もある。

ゲストスピーカーの効果的利用への高評価に関する所見が複数件あった。

学生から私語の多さを指摘する記述評価が多く、どこまで頻繁・厳格に注意をすべきか教員側に戸惑いのあることが伺える所見も見られる。

5. 改善に向けた今後の方針

多くの教員が学生の主体的・発展的学習を促すための工夫・努力について触れている。具体的な方策については、小テストや課題レポートの頻繁な導入、また、これらを学生へ返却することを通しての双方向性の確保等が挙げられている。

大教室においても授業の静粛性を保つため、また、学生の主体的学習を促すためにも、TAの計画的・機能的活用の必要性が指摘されている。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

(1) 1 教員（専任教員・兼任講師とも）1 講義科目を原則とした。

選択に際し、複数教員担当科目は除き、次の①～④に示す科目を優先した。

- ① 追加授業日を設定した社会福祉士・精神保健福祉士国家試験指定科目
- ② 社会調査士資格指定科目
- ③ スポーツウエルネス学科 2009 年度新規開講科目
- ④ 昨年度と別科目

(2) 演習・実習系の科目は対象としない

この結果、アンケート対象科目は延べ 101 科目となった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

本学部の回答者は 7,172 人で、2 年生が 2,441 人と最も多く、次いで 3 年生の 2,071 人、1 年生の 1,780 人となっており、1～3 年生の回答が 88% を占めていた。

設問項目〔授業への取り組み方〕の全体の平均値は、「出席率」が最も高く 4.49、「授業外学習」が 1.86 と最も低く、他の項目は 3.05～3.75 の範囲内であった。〔授業の進め方〕は、「板書のしかた」が 3.29 と最も低かった。他の項目は全て 3.80 以上で、なかでも「教員の事前準備」には高い評価が寄せられた。

設問項目を授業規模別にみると、〔授業への取り組み方〕の平均値は、「出席率」が授業規模に関係なく高く、むしろ授業規模が大きくなればなるほど数値が高くなっていった。しかし、他の項目は全て「50 人以下」の授業規模で数値が高く、〔授業の進め方〕も 9 項目中 6 項目で「50 人以下」の授業規模の数値が高かった。〔授業から得るもの〕も 4 項目中 3 項目で「50 人以下」の授業規模の数値が高かった。〔総合評価〕では「101～150 人」で数値が高かったが、全体としては「50 人以下」の授業規模に高い評価が見られていた。

設問項目を学年別平均値でみると、〔授業への取り組み方〕では、学年進行によって「出席率」や「積極的参加」の数値が低くなっていた。逆に、「シラバス」に対する評価は学年進行に伴い高くなる傾向があった。〔授業の進め方〕では、「聞きやすい話し方だった」など全ての項目で高い数値が得られており、4 年生の評価が最も高かった。また、「静粛性」は学年進行に伴い数値が高くなる傾向があった。さらに、全項目中「教員の事前準備」が最も高い数値を示しており、学年進行に伴い数値が高くなっていった。〔授業から得るもの〕も〔総合評価〕も、ほぼ同様の結果を示していた。

学科別の平均値では、〔授業への取り組み方〕全 6 項目、〔授業の進め方〕8 項目、〔授業から得るもの〕2 項目、〔総合評価〕全 4 項目で、スポーツウエルネス学科が最も高い数値を示していた。

以上のことから、本学部が提供する授業には学生から高い評価が示された一方で、学生の授業への積極的参加と比して授業への事前準備や授業外での学びが不十分であることが改めて明らかとなった。また、「静粛性」は学年進行に伴って保たれる傾向があり、科目選択余地の乏しい 1～2 年生には依然として多くの課題が残されていた。さらに、教員の様々な工夫にも関わらず授業規模が大きくなればなるほど「静粛性」が保たれにくいという結果が出ており、改めて授業規模の見直しが避けて通れない課題となっていることを示して

いた。なお、スポーツウエルネス学科の各カテゴリーにおける他の 2 学科以上の高い評価は、新設学科への関心の高さが持続しており、各種授業の魅力や各教員の努力がもたらした結果と思われた。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類の特徴

グループ集計は、科目選定方針の考え方に沿って、14 類型に分類して実施した。これらのうち、4つのグループ（グループ1および3、7、9）は、2009年度国家試験から大幅に改定された社会福祉士・精神保健福祉士国家試験指定科目とした。

3-2 グループ集計結果の特徴

一斉授業評価の対象となった社会福祉士・精神保健福祉士国家試験指定科目が入っているグループ1および3（前期科目）は、全体の平均値とほぼ同様の結果が得られ、[授業の進め方] [授業から得るもの] [総合評価] で、全体の平均値よりやや高い数値となっていた。一方、グループ7および9（後期科目）は、全体の平均値よりやや低い評価結果となっていた。本授業評価アンケートから両者の違いがなぜ見られたのかを類推すると、国家試験の受験がまだ大分先にあると判断し、前期に持っていた国家試験への意欲と期待が後期になって薄れたためではないかと思われた。

4. 今後の改善に向けて

今回の授業評価については、初めて評価を受ける科目が増えたにも関わらず、全体として概ね満足のいく評価を受けていた。これは、学生の評価を謙虚に受け止め、視聴覚教材等を活用したり、グループ・ディスカッション等の参加型・対話型の授業を採り入れるといった日頃の各教員の学生評価に対する地道な改善への努力の賜物と思われた。その意味で、本授業評価は、自己点検の道具として一定程度機能していると考えることができた。しかし、昨年度も指摘されていたように、同一の設問で一律にデータ処理することが果たして妥当なのかを改めて検討する必要があると思われた。また、授業評価による授業改善の方向が往々にして学生にとっての理解しやすさ・わかりやすさに向けられがちのため、授業評価の評点を上げる努力が授業の質の低下につながってしまうのではないかと懸念された。学生による授業評価が授業の質の低下を招かないように、教員には教育・研究における新たな知見の積み重ねが、学生には学びを通しての深い考察が求められる。と同時に、そのために必要な制度改善も図っていく必要がある。

「静粛性」と授業規模の関係を上記したが、大学として中長期計画に基づく授業規模縮小の努力と具体策の検討を早急に行っていく必要がある。また、社会福祉士・精神保健福祉士国家試験指定科目を中心とした科目では、学部として国家試験対策を別途検討しつつ、授業の質を深めていくための努力を教員個々に模索していく必要があると思われた。さらに、「板書のしかた」に関する設問は、映像視覚教材を使用する教員が大多数となっている現状を考えた時、設問自体の見直しが求められていた。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

本学部では次のような方針で科目を選定した。

- (1) 「総合展開科目」全科目
- (2) 初年次教育科目
- (3) 講義科目すべて。このほか、心理学科2年次「心理学文献講読1」、「心理学文献講読2」および映像身体学科2年次「基礎演習」。

また、「現代心理学入門」、「心理学概説」、「心理学文献講読」、「映像身体学への道」などの「複数教員担当科目」も含め、専門展開科目の講義科目や「心理学文献講読」などは兼任教員担当科目も含めて実施した。

2009年度完成年度を迎え、また、2010年度から新カリキュラムをスタートさせる本学部では、昨年度同様心理、映像両学科を結びつけ学部全体の性格付けにもかかわる「総合展開科目」と初年次教育に関する科目に加えて、旧カリキュラムの総点検の意味も込めて、講義科目すべてを対象に加えた。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

「総合的に見て・・・この授業を受けて満足した」が2009年度学部平均3.81で、2007年度3.60、2008年度の3.76よりも改善された。これは一つには、学年進行によって4年次生まで到達したことによると考えられる。事実2009年度学年別の平均もこの項目は1年次から順次4年次にかけてポイントが上がっている。これは、学年を積み重ねるごとに着実に専門科目への取り組みと理解度が向上しているという点では評価できる。これはもちろん、低学年次での満足度をあげる教員の努力を不要とするものではない。

気になる点としては、まず、（これは本学部に限らない傾向であるが）「授業時以外に学習した時間」の少なさである。アンケート実施時期と回答率（60.78パーセント、2008年度は62.82パーセント）から見てそれなりに授業に食い下がってきた学生が対象と思えるのだが、それで学部平均で2.04、週1時間以上費やした者の割合が回答の30%以下であり、2時間以上となると10パーセントに満たない。本学部では、アンケートを実施していない実験・実習科目やワークショップ科目において授業時以外にも多くの時間を費やさなければ課題が遂行できないようになっており、それらの科目では学生が熱心に取り組んでいることはたしかだが、カリキュラム全体へのバランスの取れた自学自習の姿勢を学生に促す必要があるだろう。

「総合的に見て・・・学問的興味をかきたてられた」の回答は学部平均で3.79（2008年度3.76）、学科平均でも心理学科科目3.76、映像身体学科科目3.74、総合展開科目3.91と他学部と比較しても決して低くないのだが、「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」が学部平均3.03（2008年度学部平均2.97）、心理学科科目平均2.90、同じく映像身体学科科目で3.14、相互展開科目で3.08であった。学問的興味と発展的な学習とのこのギャップの存在は、授業時以外の学習時間の少なさとあいまって、一連の問題を形成しているといえよう。

「学部等による設問」に関してはおおむね肯定的な評価といえるが、そのなかで「現代心理学部の教育研究設備に満足している」の項目がやや低い点に注意を喚起しておきたい。

既存の高度な設備のよりいっそうの活用が可能となる環境と更なる研究や実習用のスペースの充実を望みたい。

3. グループ集計について

3-1 心理学科「心理学文献講読1」「心理学文献講読2」

それぞれが半期を複数教員が担当し、かつ、並行して複数開講される英語文献講読科目であり、必修科目である。各期の比較だけでなく通年の比較を行った。

学生の授業への取り組みの積極性は高く、授業時以外の学習の度合いも高かった。専門知識の習得や自分で学ぶ姿勢を身につけるといっても評価は高い。いくつか評価のばらつきがある設問もあるが、そのなかで気になるのは授業の量の適切さの評価である。特に前期では専門的な英文の読解に慣れていないせいもあるであろうが、前期のほうがやや評価が低いことである。

3-2 映像身体学科「基礎演習」

2年次生を対象に複数教員が共通テキストを用いて専門的文献の講読の基礎を身につけさせる必修の演習授業である。テキストが必ずしも担当教員の専門ではないこともあって、学生の反応にややばらつきが見られた。全体として約半数の学生が自分で調べ考える姿勢を学んだと評価しているのを見ると、この率を上げるために、やはり、よりいっそうの小規模の演習形式の授業の必要性を感じさせられる。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

各担当教員は、学生による授業評価を真摯に受け止め、また、「記述による評価」に対しても、学生からのフィードバックに励まされ、改善すべき点の明確化に役立っている。

なお、所見票にて、文献講読科目における視覚教材の使用への設問が適切であるかどうか、スクリーンの位置や照明の問題などでしばしばパワーポイントの多用と板書がトレードオフ関係になることなどを指摘する教員の声もあった。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 肯定的評価

パワーポイントや映画などの視覚教材の利用はおおむね好評である。心理学科であれば、臨床の現場、映像身体学科であれば、普段見られない映画や演劇、ダンス、また現代美術などの映像が学生に評価されている。

5-2 否定的評価

教員の努力は学生によって評価されているように思える。否定的な評価で多いものは、リアクション・ペーパー配布のタイミングや映像機器等のセッティングに要する時間のロス、音響設備などに対するものが多く、SA、TAのより一層の配置や、設備の改修などによって対応していく必要があるかもしれない。

6. 今後の改善点

映像資料などを用いることによってわかりやすい授業、学生の知的好奇心を刺激する授業を心がけることは当然として、ただ、その努力が却って、授業外での学生の活動への関心を殺いではないかと危惧する。映像身体学科に関して言えば、授業時に見た映画で満足してしまうのではなく、どのようにして学生たちを学外の映画館やさまざまな公演や、美術館などへと現実に足を運ばせるか。教員にとっても学生にとっても授業は授業時間内で完結しないものであることを、学生に自覚させる方法の模索が求められているだろう。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

全学共通カリキュラム（以下、全カリと略）では、2009年度のアンケートを次の方針で実施した。設問項目は一部を見直したが、基本的に従来どおりとした。実施科目は全カリ総合Aのうち講義系科目を担当する教員1名につき年間1科目とした。

回答者数は21,423で、履修者数(38,457)に対する回答率は55.71%であった。この値は全学の平均値56.99%とほぼ一致する。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 全体集計

1) 設問科目別平均値の全体的傾向

設問科目別平均値では、5つのカテゴリー（「Ⅰこの授業へのあなたの取り組みについて」「Ⅱこの授業の進め方は」「Ⅲこの授業から得るものができたこと」「Ⅳ総合的にみて、この授業は・・・」「Ⅴ学部等による設問」）に属するほとんど全ての設問で2008年度調査の結果を上回った（「出席率（Ⅰ）」「授業内容の量（Ⅱ）」「自分で調べ、考える姿勢（Ⅲ）」「現代に通じる普遍的な意味（Ⅳ）」の設問では変化なし）。2008年度調査の報告書では、比較可能な2006年度調査と比べて全ての設問項目でスコアが上回ったと指摘されていたが、2009年度調査ではその2008年度調査をさらに上回るスコアとなった。

目立った特徴としては、スコアが前年度調査に比し、かなり高くなった項目として、Ⅰのカテゴリーの「この授業に積極的に参加した」(3.73⇒3.79)、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(2.89⇒2.97)があること、これに準じてスコアを上げた項目としてⅡのカテゴリーの「各回の授業のねらいは明確だった」(3.84⇒3.88)、Ⅲのカテゴリーの「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」(3.68⇒3.73)があげられることである。Ⅰのカテゴリーに新設された「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の平均スコアは1.81(回答選択肢は5つ[平均して一週間に5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間])であった。

「学生による授業評価アンケート報告書(2008年度)」の全カリの該当箇所に、担当教員の授業運営能力に関わって、『Ⅱこの授業の進め方は・・・』と『Ⅳ総合的にみて、この授業は・・・』では、ほとんど評価4に近い値となっており、教員の授業改善に対する真摯な対応が窺われた」との記述があるが、2009年度は関連質問項目の全てで2008年度のスコアよりよくなっている。改善の一層の進展が見られる。

2) 「学年別平均値」「学科等平均値」の特徴

この他、「学年別平均値」「学科等平均値」に、一定の傾向がみられた。すなわち、「学年別平均値」では4年次はⅡ、Ⅲ、Ⅳのすべての項目で他のどの年次よりも高いスコアであった。一年次はⅠの授業参加姿勢に関わる「授業全体を通じての出席率」、「この授業に積極的に参加した」「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」で他の年次との比較でスコアが高いが、Ⅲ、Ⅳのスコアは相対的に低い。Ⅲ、Ⅳに関しては、概して低学年（1年次、2年次）でスコアが低い。「学科等平均

値」では、「心身への着目」でⅣの全ての項目で最高スコアであること、Ⅱの聞きやすさ、授業内容の量の適切さ、授業のねらいの明確さでスコアが高いことが目につく。

3) 相関係数表の特徴

最後に「相関係数表」から分ったことを指摘する。Ⅳの「授業のわかりやすさ」「授業目標の明確さ」はⅡの「授業のねらいの明確さ」「授業内容の明確さ」との相関が高い。Ⅳの「授業の満足度」に関しては、同じⅣの「学問的興味をかきたてられた」との相関がきわめて高い(0.792)。Ⅰ「授業の出席率」、「履修にあたっての準備」とⅣの総合評価や満足度との相関はほとんどない。

2-2 グループ別集計

2009年度の「グループ別集計」では、科目の分野と試験方法の違い(筆記試験(持込可)・筆記試験(持込不可)・レポート試験・平常点試験)に着目し、総合Aの科目群を前後期それぞれ10グループに区分して、集計・分析を行った。

グループ別集計では、試験方法の違いによる大きな差異はなかったが、「グループ16」(自然領域;筆記試験)、「グループ18」(社会領域;レポート試験)、「グループ19」(自然領域;レポート試験)でⅣの総合評価のスコアが高かった。すなわち、「授業のわかりやすさ」「授業目標の明確さ」「学問的興味の惹起」「授業満足度」の順に、「グループ16」、「グループ18」「グループ19」では、表のようであった。傾向的に4点台を超えるのは、これらのグループのみである。他方、カテゴリー評価でも指摘されているように、総合評価が低下の一途をたどっている部分もあるので、注意を要する。

	授業のわかりやすさ	授業目標の明確さ	学問的興味の惹起	授業満足度
全体	3.85	3.84	3.72	3.79
グループ16	4.2	4.1	4.0	4.1
グループ18	4.1	4.1	4.0	4.0
グループ19	4.1	4.0	3.9	4.0

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

教員の所見票の記述が義務付けられているが、所見を寄せない教員の割合が目立つカテゴリーがある。この点は全カリFD委員会でも話題となった。検討課題である。

4. 今後の改善に向けて

全カリでは現在、そのカリキュラム体系の大幅な改革を審議中である。その体系の再構築もさることながら、授業規模の適正化、授業方法の改善、成績評価の厳正化など改善のためのプランが検討されている。

改革の効果がどの程度、学生の授業の受講姿勢、問題意識、さらには授業全体の総合的評価につながっていくのかを把握、分析できる調査につなげていく必要がある。グループ評価のなかの指摘にもあるように、学生評価のアンケートの実施要領、質問項目の再検討

は不可欠の課題である。

5. 総合Aの各カテゴリーの総評

5-1 「人間の探究」

学部等平均値は各項目ともほぼ全体の平均値に近似しており、顕著な特徴はない。全カテゴリーの他のカテゴリーと比較しても、昨年度（2008年度）と異なり、指摘するほど低い項目は見当たらない。敢えてあげるなら、Ⅱ8「映像視覚教材の効果」が若干低いことくらいである。これは、そもそも使用頻度が他のカテゴリーより低いからとも考えられる。

Ⅱ、Ⅲ、Ⅳともに昨年度に比べ評価が上がっている原因は、もとより特定困難であるが、所見から推察できることは、少なくとも所見を寄せた教員に関する限り、「わかりやすい授業」への地道な改善努力を怠る教員はいないということである。継続して所見を寄せる教員は、学生の評価を真摯に受けとめている。

このカテゴリーに限る特質ではないと予想されるが、所見は判で押したように、「学生自身が考える姿勢」や「発展的な学習」に十分導くことができなかつたと「反省」している。必ずしも自主的な「探究」には至らなかつたということになるが、「わかりやすさ」への努力が仇になっている可能性もなくはないと思われる。

今年度（2009年度）限りで定年退職したある教員は、「毎年改善努力してきたつもりであるが、受講者の側で、理解できないのは教員の講義の仕方が悪いからというような態度がかつてより目立つ」と言い残している。教員と受講学生の協働は、易々と成り立つものではないとしても、この指摘は立ち入って丁寧に分析すべき課題を示していると言えるだろう。

5-2 「社会への視点」

この分野のアンケート所見票全体からは、例年と共通しているが、やはりリアクションペーパーへのリプライ、映像資料の活用、ゲスト・スピーカーの招聘の3つが、学生からの高評価につながりやすいことが明らかになっている。

しかしながら、授業への予習、授業時以外の学習をしたかどうかについては、他項目と比べ評価が低いという傾向もまた継続的に見られているようだ。

同様に、受講者数が開講時限と関連する現象も予測されたとおりであり、特に1時限開講の授業は受講者数の少なさが目立った（授業を提供する環境としてはプラス面もあるが）。

また、履修者数が500名を越え、成績評価方法を変えなければならなかつた科目が1つあった。今後は、履修者制限なども考慮していくべき段階かもしれない。そのほか、履修者数に比して、回答数が少ない科目も散見された。1度きりのアンケートであることもあり、即断はできないが、もしそれが出席率の低さを反映しているのであれば、何らかの取り組みが必要であるとも考えられる。

担当教員の所見から見ると、今回、私語の問題が多く授業で頻発しているような印象は受けなかつた。この点に関しては、ある程度取り組みが功を奏していると考えられよう。

アンケート自体についても、実施頻度、質問内容を含め、あらためて検討の段階に来ていると思われる。たとえば、パワーポイントやプリント配布が一般的となりつつある

今、板書の適切性については、むしろその質問項目自体を再考すべきであるのかもしれない。

また、数としては多くなかったが、話し方、板書スピードなどをめぐる学生からの要求に対し、大学教育の場であるというコンテキストを考えると甘えであるという趣旨の担当教員所見もあった。授業とは、学生の側の姿勢が問われる場でもあるということも忘れてはならない。

ある担当教員所見にあったように「立教大学における全学共通カリキュラムを含めて、初年次教育としての性格および内容を有する科目については、受講者一人ひとりに大学での『学び』をそれぞれの生き方に位置づけてもらうための重要な過程である」ということを、供給サイドである私たちが一丸となって自覚し、実践していくべきであるという思いを新たにした。

5-3 「芸術・文化への招待」

学部等平均値は、全体の平均値を下回る項目が大半を占めている。全カリーの他のカテゴリーと比較しても、ほとんどの項目が最下位で、とくにⅡ、Ⅲ、Ⅳの低評価が目立っている。所見を寄せない担当教員が3割に及んでいるが、限られた所見から推測されるのは、「芸術・文化への招待」の「招待」の意味について、教員と受講学生の間に齟齬が生じているのではないかということである。

他カテゴリーに比して低評価が並ぶⅡ（授業の進め方）のなかで、高評価を得ているのは8（映像視覚教材の効果）である。「芸術への招待」として映像教材ばかりではなく、直接項目化されていないが、音声教材、さらには生演奏等は好評を博している。これは、一方であまり視聴覚教材を用いない授業の評価を下げ、他方で受講学生を受動的観衆としている可能性を否認しない。教員はこうした教材を契機に批判的な掘り下げを期待するが、限られた時間のなかで伝えるべき重点を絞ることに苦慮しているようで、所見には今後の課題として言及する例が散見される。前向きな姿勢をさらに高めていくものと思われる。

ただし、単年度に限らず、過去2年度と比較してみると、次第に評価が下がる傾向がみられ、懸念される。教員も学生も異なるので安易な判断はできないが、例えば総合評価としての満足度（Ⅳ4）は、3.92（2007年度）、3.73（2008年度）、3.69（今年度＝2009年度）と低下の一途を辿っている。所見からは、私語対策はもはや教員個人の努力では限界である様子が窺え、教室環境のさらなる改善が急務である。

その他、所見には学生にアカデミックモラルとともに、レポート課題の狙いと作成の勘所をきちんと伝えるべきとの指摘があった。確かに、授業実践のうで継続的配慮を要する課題であろう。

5-4 「心身への着目」

全カリ総合科目「心身への着目」の科目群は、心理学分野、スポーツ科学・ウェルネス学分野、福祉学分野から構成されている。全カリ総合科目の他の科目群と比較してみると、Ⅳ「総合的にみてこの授業は・・・」の1～4の設問全てにおいて最も高い数値を示しており、学生から高い評価を得られていることがわかる。この値は2008年度の専門学部の値との比較でも高い値であった。しかしながら、2008年度の数値との比較において

は全体的に若干低くなっている傾向がみられたことは気になることであった。

また、他の設問で特徴的だったことは、授業以外の学習時間が短かったこと、静肅性が保たれていたかの項目の数値が低かったことであった。この結果のうち静肅性の低さについては、この科目群の中に比較的大規模授業が多く含まれていたことによるものである。このことについては全学的な取り組みがなされており、特に全カリでは担当者連絡会において何度か議論され、様々な工夫がなされてきている。各教員のコメントでも、学生への注意喚起の方法などで改善の努力がなされている。わかりやすく、学問的興味をかきたてられた授業と評価された一方で、授業以外の学習時間が少ないことについては、CHORUS などの利用による課題を積極的に取り入れる必要があるのではないかと思われる。

5-5 「自然の理解」

この分野は35科目について2,149名の学生からの回答があった。立教大学は圧倒的多数の学生が人文、社会科学系の学部属しているため、総合Aでは、この分野だけが理系なので、人間の探究（FA）～心身への着目（FD）と、かなり違った傾向が出るかと思っただけ、それほど差は出なかった。

出席率は昨年の4.51から4.56へと上昇した。I2～I6の項目も若干の上昇が見られる。差はわずかなので単独では有意とは言い難いが、すべての項目での上昇なので、この1年で改善が見られたと考えるべきであろう。またIIの授業の進め方でも、同様にすべての項目で上昇が見られ、教員の授業改善への努力が、わずかずつでも進みつつあるという印象を持った。一方、授業から得るものについては、わずかだが値が下がっている。総合評価も何とも言えない。

学生からの評価に対して担当教員の所見を見る限り、多くの教員は妥当な評価だと考えており、このアンケートが授業の改善に役立っていると思われる。「こちらが労力を割いたところがきちんと評価された」との感想を述べた教員もいた。ただ学生の実際の学力と教員が期待する“基礎”学力にズレが感じられる講義も見受けられるように思う。教員が、現在の学生、いま自分が立教大学で教えているクラスの学生がどういうタイプ、どういうレベルの学生なのか、しっかり把握していないとミスマッチが起きる可能性がある。

理系の講義だとどうしても専門用語の多用が起きる。このあたり、教員側の工夫が必要だと思う。パワーポイントを用いる講義が多いようだが、早すぎてついていけないという声がある。あくまでもパワーポイントは講義の補助スキルであって、基本は教員の教える姿勢であろう。100人を超える講義だとどうしても後ろの方の学生に聞き取りにくいという声が出る。

また板書と声の聞き取りに関して改善を求める声がある。丁寧に書いて、ゆっくり話し、マイクを使うなど教員側の努力で十分に対処できる問題である。

「改善に向けた今後の方針」を見ると、多くの教員は真摯に講義を改善しようという姿勢が見て取れる。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

各教員の主要な講義科目について、1 教員 1 科目の授業評価を行ってきた。これは継続的評価を行うことにより、各教員の改善・工夫、その評価について検討する資料となると考えているためである。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

表 2 からは、回答率が 77.70%と、全学平均の 56.99%をはるかに越えており、異文化コミュニケーション学部を除けば第 1 の数値を示している。講座学生の出席率の高さを示しているとされる。また表 3 における学年別回答者数の偏倚、1・2 年生に多く、3・4 年生に少ない点は、1・2 年生の段階で講座科目を集中して履修しているためである。

次に表 4 の各設問に項目についてみる。

I 「この授業への取り組み」においては、出席率については評価 4 以上、他は 3 段階であるが、I 6 の「授業時以外の学習時間」においては、1 段階となっている。この点については、ある意味で課題とすべきか否か、検討すべき点である。

II 「授業の進め方」においては大方が評価 4 以上であるが、II 7 「板書のしかた」・II 8 「映像教材の使用」に関しては 3 段階となっている。この 2 点については今後の課題ともされる。ただし 2008 年度における評価と比較すると、全ての項目において改善が見られているとされよう。

III 「授業から得るもの」においては、III 2 「専門知識」が評価 4 であるが、その他は評価 3 の段階である。これは講座科目としては、当然のことともされる。

IV 「総合的にみて」においては、IV 3 「学問的興味」は評価 3 段階であるが、その他は 4 の段階となっている。

全体的に見て、学生から評価は 4 の段階であり、学生の評価は高いとされる。さらに前年度と比較すると、多くの項目で数値が高くなっている点は、教員側の種々の改善・工夫の結果を示しているとされよう。

表 5 からは、上記表 4 において評価 4 以上となっている項目においては、当然ながら 80% 前後の学生が高い評価を示していることとなる。表 6 「授業規模別」・7 「学年別」・8 「学科別」においては、有意な所見を見いだすことは困難であろう。ただ表 6 において、51～100 名クラスの評価が、50 名以下クラス、101 名以上クラスの両評価よりも低い設問が多く見られる点、興味深い。

表 9 における各設定項目の相関では、IV 「総合評価」において「明確な問題の提起とその説明」を「わかりやすく」講義したものが高い評価を得、さらに IV 4 「授業の満足度」からすると、学生はそこで「得たもの」に判断基準を置いていることとなる。それはまた当然のことである。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が自らの授業に関しての学生評価を、各項目における自己の評価との間に大きな懸隔を示さないものとして理解している。

ただし例年の通り、設問項目の妥当性についての批判があった。例えば、Ⅱ8「映像視覚教材（ビデオ...）の使用が効果的だった」の学生評価は高い。ただし、学生が感じる「効果」と、科目担当者の考える教育的効果との間には隔たりがあるとする疑問が呈されている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「記述による評価」は多くない。ただし学生から高い支持を得ている参加型授業などは、さらに積極的に展開しようとする意見が見られる。また学生の不満(ex. 一方的講義形授業・出欠の取り方)・改善要求(パワーポイント映像劣化など)に対しては、その指摘を真摯に受け止めようとしている。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

評価の低い点、「板書」・「視聴覚教材」の改善に向けて姿勢を示す所見が多い。さらに「授業時以外の学習」についての工夫を考えようとする教員が見られる。

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

参加型授業、グループ討議といった方法を取り入れた授業への評価が高い。また視聴覚機材を使用している講義には高い評価が示されている。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

多くはないが、板書の仕方、パワーポイントの提示法、レジメの内容、出欠の取り方、遅刻者への対応などへの意見、不満などが見られる。

5. 今後の改善に向けて

前年度と比べ、個々の項目で評価が高くなっており、それは各年度における各教員の努力結果とされるわけであり、それは今後とも継続されよう。

ただしⅠ6「授業時以外学習」の評価1段階については、その対策として、単に課題提出といった方法によるべきではないとする意見もある。すなわち講座においては、それぞれの課程において、本「アンケート」調査の講義形式以外の科目が多数存在し、そこでは、それぞれの課程において多様な形式での学生指導がなされているからである。今後の問題点でもある。

5. 2009 年度のまとめと今後の展望

2009 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 東條 吉純

「学生による授業評価アンケート」制度が 2004 年度に全学でスタートして、すでに 6 年
が経過した。本アンケートの開始にあたって確認された目的は以下のように整理される。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修を行う機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

開始当初の 3 年間は、③～⑤はもちろん、特に①、②の目的が意識され、一教員 1 科目
(講義科目) を実施対象科目として指定することを原則としたアンケートが実施された。
この間に、⑥、⑦の目的およびアンケートの積極的活用という観点も強く意識され、2007
年度からは、一教員 1 科目の原則にこだわらず、各学部・学科等の必要性に応じてより自
由にアンケート実施科目群の選定を行うことを可能とした。この科目選定方針の下で、一
教員 1 科目の原則を継続する学部等がある一方で、カリキュラム上特徴的な科目群につい
ての集中的な調査を実施する学部等もいくつかあり、同時に科目群をいくつかのグループ
に分けて集計しそれぞれの特徴を析出する試みも行われた。

2009 年度はこの 3 年目にあっており、2010 年度以降の中期的な実施計画について活発
な討議が行われた。その際、一教員 1 科目の原則による実施は、教員全員が自らの自己研
修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要であるとの全学的合意を踏まえ、
かつ、全学教務委員会における学部等からの意見や、他大学の実施状況調査を参考にして、
2010 年度からは、一教員 1 科目の原則による科目選定を三年毎に実施し、それ以外の年度
は学部・学科等の必要に応じて科目選定するとの決定が行われた。アンケートは授業時間
の一部を使って実施されるため、授業時間確保の要請との関係において最適な頻度で実施
することが求められる。また、一教員 1 科目の原則による繰り返しのマンネリ化ないし効
果低下を避けつつも、個々の教員が、学生の声に真摯に耳を傾け、教育方法を工夫・改善
し、さらにその結果をさらなる改善の足掛かりとするという一連の流れが途切れぬよう、
慎重に制度を設計することが必要である。上記 2010 年度以降の実施計画は、一定の人的・
物的資源制約の下での最適解を模索した結果である。

授業評価アンケートをきっかけとして、個々の教員の教育方法の工夫・改善への意識が
高まり、教育力向上にもたらしたことは、アンケート開始以来、各項目の評点値が全体と
して向上してきたことから明らかである。授業評価アンケート制度の大きな成果として
積極的に評価できるだろう。また、各学部・学科においてカリキュラム上特徴的な科目群

に対するアンケート調査は、カリキュラム改定も視野に入れた組織的な教育力向上のための資料の一部として役立てられることが今後も期待される。

他方、この 6 年間のアンケート実施を通じて、本アンケート制度の運用上の課題もいくつか明らかになっている。

たとえば、授業評価による授業改善の方向が、学生にとっての理解しやすさに向けられる傾向にあり、授業評価の評点値を上げる努力がかえって授業の質の低下につながってしまうのではないかと懸念が、学部等総評においてたびたび指摘されている。アンケート結果には、学生の「生の声」が反映されており、授業の改善点が評点値や自由記述に鋭く表れる一方で、学生の未熟さに起因する一面的な評価もまたはっきりと反映される。学生の要求や期待がどこにあるのかを知りその期待に応えることも大切だが、学生の「ニーズ」に振り回されることなく、高等教育機関として果たすべき役割を常に意識して授業を行う必要がある。その意味で、学生の意見を教員の立場からしっかりと判断し取り入れるべきは取り入れるとともに、学生に対してはその授業の狙いがどこにあるのかをしっかりと伝え、学生の側の意識を高める努力がなされなければならないだろう。

「記述による評価」欄の記述について、一部の学生が授業評価アンケートの趣旨を認識せず、極めて無責任な「わるふざけ」や「中傷」などの不適切な記述がしばしば報告されてきた。この問題に対して、「記述による評価」欄に注意喚起文を挿入する等、実施にあたってアンケートの意義や目的、学生が授業を評価することに伴う責任について時間をかけて伝える努力を行った結果、こうした不適切記述の数は減少している。2009 年度においても、各学部等による自由記述の実態調査報告を受けて、注意喚起文の改定作業を行った。学生の真摯な評価姿勢はこの制度の必須の前提条件であり、今後ともこの努力は継続していきたい。

本制度のより根本的な限界として次の問題点も指摘されてきた。アンケートは学期末の授業時間内に実施される。したがって、アンケート回答者が、最後まで（あきらめずに）受講した学生という偏った属性をもつことはその性格上避けられない。その意味では、履修登録をしながらも途中から欠席するようになってしまった学生をどのように把握し、その「声」を集めるかが課題として残る。アカデミックアドバイザーなど、授業評価アンケート以外での学生の声の収集ルートを同時に活用し、教育力向上のための資料として総合的に役立てる必要がある。

スタートして 6 年間が経過し、授業評価アンケート制度は本学においてほぼ定着し、新たな段階に入ったと言ってよい。科目選定上の工夫やマークシート質問項目の改定等はもとより、CHORUS 等の活用によるアンケート実施方法の抜本的変更など、改善の余地はまだまだありそうである。本制度のさらなる進化が大いに期待される。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数

延べ回答者数 82,606名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	11,192	7,565	67.59
経済	3,770	2,753	73.02
理	6,748	4,148	61.47
社会	16,577	9,480	57.19
法	17,110	6,126	35.80
経営	15,962	8,427	52.79
異文化コミュニケーション	407	380	93.37
観光	6,862	4,785	69.73
コミュニティ福祉	11,991	7,172	59.81
現代心理	11,703	7,113	60.78
全学共通カリキュラム	38,457	21,423	55.71
学校・社会教育講座	4,162	3,234	77.70
合計	144,941	82,606	56.99

注1) 履修者数・回答者数はアンケート実施科目の延べ履修者・回答者

注2) 学部等はアンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	3,583	2,266	1,078	488	150	7,565
経済	2,552	89	19	29	64	2,753
理	1,274	1,512	1,100	186	76	4,148
社会	2,917	3,264	2,341	777	181	9,480
法	1,215	1,996	1,850	975	90	6,126
経営	2,924	2,543	1,984	652	324	8,427
異文化コミュニケーション	241	111	2	1	25	380
観光	910	2,701	916	178	80	4,785
コミュニティ福祉	1,780	2,441	2,071	750	130	7,172
現代心理	2,090	2,569	1,933	401	120	7,113
全学共通カリキュラム	8,815	6,228	3,938	1,984	458	21,423
学校・社会教育講座	1,256	1,324	468	74	112	3,234
合計	29,557	27,044	17,700	6,495	1,810	82,606

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 科目開設学部等別平均値

表3 文学部 (2009年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,552	4.66	0.61
I 2 この授業に積極的に参加した	7,548	3.88	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,544	3.22	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,536	3.18	1.13
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	7,477	3.34	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,535	2.37	1.18
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,543	3.82	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,543	3.84	1.02
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,542	3.81	1.04
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,527	3.84	1.04
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,531	3.79	1.27
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,519	3.82	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	7,483	3.29	1.11
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	7,452	3.47	1.20
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,516	4.09	0.94
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,539	3.81	1.03
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,537	3.80	0.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,536	3.48	1.09
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,518	3.56	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,537	3.76	1.09
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,533	3.79	1.05
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,532	3.73	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	7,530	3.73	1.12
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	7,363	4.11	1.07
V 2 この授業の受講者数は適切だった	7,363	3.95	1.14

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表4 経済学部 (2009年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,748	4.69	0.62
I 2 この授業に積極的に参加した	2,751	4.05	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,747	3.30	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,747	3.29	1.13
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	2,727	2.93	1.15
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,740	2.63	1.13
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,746	3.77	1.15
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,748	3.57	1.16
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,745	3.77	1.08
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,747	3.78	1.07
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,744	3.45	1.18
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,741	3.65	1.07
II 7 板書のしかたが適切だった	2,731	3.21	1.14
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	2,720	3.39	1.20
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,742	3.94	1.01
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,745	3.50	1.04
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,743	3.78	0.99
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,744	3.50	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,740	3.48	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,746	3.67	1.17
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,744	3.77	1.06
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,746	3.46	1.14
IV 4 この授業を受けて満足した	2,746	3.58	1.15
V 学部等による設問			
V 1 (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった	2,495	4.07	0.94
V 2 (基礎演習) 自分の意見を積極的に言えるようになった	625	3.52	0.93
V 3 (基礎演習) レジュメやレポートを作成できるようになった	622	3.96	0.86
V 4 (情報処理系科目) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった	1,150	3.69	0.92
V 5 (情報処理系科目) Power Point ファイルの作成ができるようになった	1,153	3.74	0.96
V 6 (情報処理系科目) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できるようになった	1,151	3.60	0.96

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表5 理学部（2009年度平均値および2008年度平均値）

2008、2009年度とも科目選定方針が1教員1科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設問項目	2009			2008		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,133	4.74	0.59	4,168	4.70	0.65 **
I 2 この授業に積極的に参加した	4,123	3.96	0.96	4,171	3.82	1.07 **
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,121	3.23	1.03	4,164	2.98	1.08 **
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,127	3.19	1.08	4,168	3.03	1.12 **
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,110	3.24	1.03	4,154	3.06	1.07 **
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,124	2.47	1.11	—	—	—
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	4,128	3.73	1.10	4,167	3.48	1.19 **
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,124	3.71	1.05	4,167	3.44	1.13 **
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,126	3.80	1.00	4,163	3.55	1.10 **
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,119	3.82	1.01	4,156	3.56	1.10 **
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,120	3.92	1.04	4,162	3.70	1.14 **
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,113	3.60	1.13	4,156	3.43	1.15 **
II 7 板書のしかたが適切だった	4,100	3.41	1.14	4,144	3.18	1.18 **
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	4,043	3.40	1.19	4,102	3.23	1.21 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,108	4.00	0.96	4,149	3.84	1.03 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,115	3.70	0.98	4,159	3.50	1.08 **
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,111	3.77	0.95	4,160	3.54	1.03 **
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,111	3.46	0.98	4,158	3.27	1.04 **
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,102	3.44	1.00	4,150	3.26	1.05 **
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	4,110	3.68	1.11	4,156	3.40	1.19 **
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,110	3.77	1.00	4,158	3.52	1.10 **
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,107	3.60	1.06	4,156	3.35	1.14 **
IV 4 この授業を受けて満足した	4,109	3.69	1.06	4,158	3.43	1.16 **
V 学部等による設問						
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	3,901	3.87	0.96	3,504	3.71	1.01
V 2 （1年次前期必修科目のみ）教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	403	3.56	1.07	—	—	—
V 3 （必修科目のみ）授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	1,930	3.63	1.11	—	—	—

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

注3) I 6・V 2・V 3は、2009年度に設問内容を変更/追加したため、比較は行っていない

注4) *印は2008年度と2009年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$

表6 社会学部 (2009 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,459	4.57	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	9,462	3.73	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,449	3.01	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,437	2.99	1.07
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	9,391	3.33	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,438	1.99	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,447	3.81	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,452	3.84	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,446	3.78	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,436	3.80	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,439	3.65	1.15
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,425	3.71	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	9,399	3.20	1.09
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的 だった	9,399	3.68	1.15
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,412	4.05	0.91
III この授業から得るものがあったこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,438	3.75	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,437	3.74	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,432	3.27	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,415	3.69	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,433	3.71	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,430	3.74	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,429	3.64	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	9,428	3.70	1.06

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表7 法学部（2009年度平均値および2008年度平均値）

2008、2009年度とも科目選定方針が1教員1科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2009			2008		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,105	4.43	0.90	6,333	4.41	0.93
I 2 この授業に積極的に参加した	6,103	3.70	1.06	6,328	3.66	1.09 *
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,095	2.96	1.05	6,323	2.84	1.05 **
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,095	2.96	1.11	6,320	2.86	1.12 **
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,049	3.30	1.08	6,292	3.25	1.08 **
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,088	2.16	1.02	—	—	—
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	6,105	3.78	1.18	6,329	3.70	1.18 **
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,106	3.83	1.03	6,328	3.77	1.02 **
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,090	3.84	1.04	6,318	3.76	1.05 **
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,085	3.86	1.05	6,312	3.79	1.05 **
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,089	3.93	1.07	6,315	3.90	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,083	3.78	1.11	6,308	3.70	1.09 **
II 7 板書のしかたが適切だった	6,050	3.19	1.15	6,274	3.16	1.14
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,004	3.32	1.24	6,223	3.18	1.22 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,071	4.06	0.95	6,305	4.01	0.94 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,094	3.75	1.00	6,319	3.66	1.04 **
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,094	3.79	0.97	6,315	3.73	1.00 **
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,091	3.29	1.03	6,317	3.19	1.03 **
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,074	3.71	1.02	6,304	3.63	1.04 **
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	6,092	3.74	1.16	6,316	3.69	1.15 *
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,091	3.85	1.03	6,317	3.75	1.05 **
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,094	3.72	1.10	6,315	3.60	1.12 **
IV 4 この授業を受けて満足した	6,092	3.78	1.09	6,317	3.69	1.12 **

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

注3) I 6 は、2009年度に設問内容を変更したため、比較は行っていない

注4) *印は2008年度と2009年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p < 0.05$; ** $p < 0.1$

表8 経営学部 (2009 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	8,394	4.64	0.68
I 2 この授業に積極的に参加した	8,392	3.94	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,378	3.35	1.10
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,366	3.31	1.13
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	8,339	3.34	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	8,365	2.51	1.22
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,373	3.87	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,366	3.82	1.07
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,363	3.88	1.05
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,352	3.88	1.06
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,353	3.60	1.22
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,339	3.75	1.10
II 7 板書のしかたが適切だった	8,290	3.42	1.12
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	8,317	3.77	1.15
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,333	4.06	0.99
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,347	3.75	1.03
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,344	3.84	0.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,340	3.55	1.08
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,330	3.70	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,343	3.80	1.14
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,340	3.86	1.07
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,339	3.66	1.14
IV 4 この授業を受けて満足した	8,340	3.76	1.14

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表9 異文化コミュニケーション学部 (2009 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	379	4.81	0.42
I 2 この授業に積極的に参加した	380	4.17	0.86
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	378	3.69	0.97
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	379	3.54	1.03
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	376	2.91	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	377	2.71	0.84
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	380	4.18	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	380	4.02	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	380	3.85	1.08
II 4 各回の授業内容は明確だった	378	3.98	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	379	4.00	0.85
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	378	3.78	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	362	3.30	0.99
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	362	3.46	1.09
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	377	4.19	0.90
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	380	4.27	0.84
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	380	3.74	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	380	4.17	0.82
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	380	3.97	0.88
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	380	3.93	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	380	3.97	1.05
IV 3 学問的興味をかきたてられた	380	3.71	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	380	3.86	1.11

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表10 観光学部（2009年度平均値）

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,780	4.58	0.71
I 2 この授業に積極的に参加した	4,773	3.68	1.01
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,777	2.94	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,774	2.82	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,743	3.18	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,766	1.91	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,776	3.71	1.11
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,771	3.80	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,771	3.69	1.09
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,765	3.70	1.08
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,768	3.64	1.12
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,762	3.65	1.09
II 7 板書のしかたが適切だった	4,741	3.27	1.07
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	4,762	3.76	1.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,762	4.05	0.96
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,771	3.57	1.05
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,773	3.60	0.99
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,769	3.16	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,763	3.46	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,772	3.61	1.14
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,774	3.62	1.09
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,770	3.45	1.14
IV 4 この授業を受けて満足した	4,772	3.53	1.12
V 学部等による設問			
V 1 わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ	4,614	2.85	0.95
V 2 わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	4,702	3.83	0.98
V 3 わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	4,701	3.93	1.09
V 4 わたしは、旅行することが好きだ	4,704	4.49	0.82
V 5 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識 した	4,698	3.46	1.04
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	4,699	3.31	1.11
V 7 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	4,700	3.41	1.10

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表 1 1 コミュニティ福祉学部 (2009 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,161	4.49	0.71
I 2 この授業に積極的に参加した	7,160	3.75	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,156	3.05	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,151	3.06	1.07
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	7,115	3.46	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,131	1.86	1.00
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,163	3.88	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,160	3.98	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,155	3.94	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,158	3.95	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,109	3.84	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,113	3.85	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	7,063	3.29	1.05
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的 だった	7,077	3.88	1.06
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,136	4.17	0.86
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,156	3.87	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,156	3.80	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,151	3.36	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,145	3.79	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,156	3.85	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,154	3.90	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,157	3.75	1.04
IV 4 この授業を受けて満足した	7,148	3.83	1.03

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 2 現代心理学部 (2009 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,103	4.59	0.68
I 2 この授業に積極的に参加した	7,103	3.85	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,090	3.06	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,082	3.03	1.11
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	7,040	3.36	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,094	2.04	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,103	3.79	1.11
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,098	3.91	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,099	3.85	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,086	3.89	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,088	4.06	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,084	3.83	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	7,053	3.26	1.05
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的 だった	7,079	3.94	1.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,080	4.19	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,096	3.92	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,096	3.83	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,097	3.29	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,082	3.68	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,096	3.74	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,091	3.83	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,092	3.79	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	7,093	3.81	1.07
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,960	4.30	0.87
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,957	4.23	0.86
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	6,954	4.27	0.84
V 4 現代心理学部の教育研究設備に満足している	6,937	3.99	0.96

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 3 全学共通カリキュラム (2009 年度平均値および 2008 年度平均値との比較)

2008、2009 年度とも科目選定方針が 1 教員 1 科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2009			2008		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	21,380	4.59	0.68	19,979	4.58	0.72
I 2 この授業に積極的に参加した	21,365	3.79	1.00	19,978	3.73	1.04 **
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	21,343	2.97	1.06	19,957	2.89	1.07 **
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	21,320	2.89	1.12	19,939	2.86	1.12 *
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	21,240	3.42	1.08	19,871	3.38	1.10 **
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1 週間に) (5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間)	21,315	1.81	0.98	—	—	—
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	21,367	3.91	1.08	19,962	3.88	1.08 *
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	21,364	3.91	0.98	19,950	3.91	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	21,355	3.88	1.00	19,946	3.84	1.01 **
II 4 各回の授業内容は明確だった	21,323	3.91	0.99	19,919	3.87	1.01 **
II 5 十分な静粛性が保たれた	21,326	3.73	1.16	19,919	3.71	1.18 *
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	21,310	3.74	1.07	19,879	3.71	1.08 **
II 7 板書のしかたが適切だった	21,131	3.26	1.10	19,774	3.23	1.09 **
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	21,212	3.83	1.15	19,763	3.81	1.16
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	21,281	4.16	0.90	19,868	4.13	0.91 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	21,340	3.82	0.99	19,932	3.79	1.02 **
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	21,333	3.73	0.96	19,923	3.68	0.98 **
III 3 自分で調べ、考える姿勢	21,321	3.16	1.05	19,922	3.14	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	21,281	3.65	1.02	19,879	3.64	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	21,334	3.85	1.06	19,921	3.84	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	21,325	3.84	1.00	19,912	3.81	1.03 *
IV 3 学問的興味をかきたてられた	21,326	3.72	1.08	19,911	3.69	1.10 *
IV 4 この授業を受けて満足した	21,320	3.79	1.07	19,910	3.76	1.10 **
V 学部等による設問						
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	19,729	4.05	1.06	17,089	4.03	1.08 *
V 2 この授業の受講者数は適切だった	19,687	3.89	1.06	17,057	3.86	1.09 **
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	19,680	4.07	0.97	17,020	4.03	0.99 **

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

注 3) I 6 は、2009 年度に設問内容を変更したため、比較は行っていない

注 4) *印は 2008 年度と 2009 年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$

表 1 4 学校・社会教育講座（2009 年度平均値および 2008 年度平均値との比較）

2008、2009 年度とも科目選定方針が 1 教員 1 科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2009			2008		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,234	4.73	0.54	2,767	4.75	0.52
I 2 この授業に積極的に参加した	3,232	3.98	0.91	2,769	4.01	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,232	3.22	0.96	2,764	3.19	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,226	3.19	1.05	2,762	3.20	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3,204	3.50	0.99	2,758	3.49	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1 週間に） (5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間)	3,224	1.99	0.93	—	—	—
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	3,233	4.24	0.89	2,766	4.23	0.93
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,233	4.13	0.87	2,767	4.10	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,232	4.13	0.88	2,762	4.13	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,227	4.18	0.85	2,764	4.17	0.88
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,230	4.29	0.87	2,763	4.25	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,227	4.11	0.89	2,764	4.03	0.94 **
II 7 板書のしかたが適切だった	3,222	3.58	0.99	2,758	3.52	1.07 *
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,210	3.88	1.10	2,753	3.77	1.12 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,224	4.33	0.79	2,756	4.31	0.80
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,232	3.98	0.90	2,767	3.95	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,230	4.00	0.86	2,767	3.96	0.86
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,231	3.47	0.99	2,766	3.46	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,227	3.83	0.91	2,763	3.80	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	3,230	4.17	0.90	2,767	4.13	0.94
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,230	4.12	0.87	2,766	4.09	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,230	3.83	1.00	2,767	3.80	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	3,231	4.03	0.94	2,767	4.02	0.98

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

注 3) I 6 は、2009 年度に設問内容を変更したため、比較は行っていない

注 4) *印は 2008 年度と 2009 年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p < .05$; ** $p < .01$

6-3 「グループ集計」科目一覧

表15 文学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	入門演習 A1	前期
2	入門演習 C1	前期
3	入門演習 C1	前期
4	入門演習 C1	前期
5	入門演習 E1	前期
6	入門演習 E1	前期
7	入門演習 F1	前期
8	入門演習 F1	前期
9	入門演習 F1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	入門演習 G1	前期
2	入門演習 G1	前期
3	入門演習 G1	前期
4	入門演習 G1	前期
5	入門演習 G1	前期
6	入門演習 G1	前期
7	入門演習 G1	前期
8	入門演習 G1	前期
9	入門演習 G1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	入門演習 J1	前期
2	入門演習 J1	前期
3	入門演習 J1	前期
4	入門演習 J1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	入門演習 B1	前期
2	入門演習 B1	前期
3	入門演習 B1	前期
4	入門演習 B1	前期
5	入門演習 B1	前期
6	入門演習 B1	前期
7	入門演習 B1	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	キリスト教学基礎演習	前期
2	基礎演習 1	前期
3	基礎演習 1	前期
4	基礎演習 1	前期
5	基礎演習 1	前期
6	基礎演習 1	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	英語基礎演習 1	前期
2	ドイツ語基礎演習 2	前期
3	ドイツ語基礎演習 2	前期
4	ドイツ語基礎演習 2	前期
5	ドイツ語基礎演習 3	前期
6	ドイツ語基礎演習 3	前期
7	ドイツ語基礎演習 3	前期
8	フランス語基礎演習 1	前期
9	フランス語基礎演習 3	前期
10	フランス語基礎演習 3	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	演習 G1	前期
2	演習 G3	前期
3	演習 G5	前期
4	演習 G11	前期
5	演習 H1	前期
6	演習 H3	前期
7	演習 H5	前期
8	演習 H7	前期
9	演習 H9	前期
10	演習 I1	前期
11	演習 I3	前期
12	演習 I7	前期
13	演習 I9	前期
14	演習 F1	前期
15	演習 F3	前期
16	演習 F5	前期
17	演習 F7	前期
18	演習 F9	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	キリスト教文化講義 1	前期
2	キリスト教文化講義 3	前期
3	心理学 1	前期
4	宗教思想 1	前期
5	倫理思想	前期
6	ドイツ語圏文化概論	前期
7	フランス文学・文化概論	前期
8	日本語学概論 1	前期
9	漢文学概論	前期
10	文芸・思想概論	前期
11	世界史概論 1	前期
12	日本史概論 1	前期
13	教育と宗教	前期
14	文学講義 101	前期

グループ9

No.	科目名	学期
1	文学講義 7	前期
2	文学講義 9	前期
3	文学講義 11	前期
4	文学講義 13	前期
5	文学講義 15	前期
6	文学講義 19	前期
7	文学講義 20	前期
8	文学講義 23	前期
9	文学講義 25	前期
10	文学講義 29	前期
11	文学講義 31	前期
12	文学講義 33	前期
13	文学講義 35	前期
14	文学講義 39	前期
15	文学講義 41	前期

グループ10

No.	科目名	学期
1	文学講義 303	前期
2	文学講義 307	前期
3	文学講義 311	前期
4	文学講義 313	前期

グループ11

No.	科目名	学期
1	ヘブライ語 1	前期
2	ギリシア語 1	前期
3	ラテン語 1	前期

グループ12

No.	科目名	学期
1	音楽学演習 1	前期
2	情報処理 1	前期
3	情報処理(PCプレゼンテーション)3	前期

グループ13

No.	科目名	学期
1	教育心理学 1	前期
2	教育社会学 1	前期
3	教育史 1	前期
4	教育哲学 1	前期

グループ14

No.	科目名	学期
1	フランス語表現演習1	前期
2	フランス語表現演習3	前期

グループ15

No.	科目名	学期
1	入門演習 C2	後期
2	入門演習 C2	後期
3	入門演習 C2	後期
4	入門演習 D2	後期
5	入門演習 D2	後期
6	入門演習 D2	後期
7	入門演習 E2	後期
8	入門演習 E2	後期
9	入門演習 E2	後期
10	入門演習 E2	後期
11	入門演習 F2	後期
12	入門演習 F2	後期
13	入門演習 F2	後期

グループ16

No.	科目名	学期
1	入門演習 J2	後期
2	入門演習 J2	後期
3	入門演習 J2	後期
4	入門演習 J2	後期

グループ17

No.	科目名	学期
1	基礎演習 2	後期
2	ドイツ語基礎演習 4	後期
3	ドイツ語基礎演習 4	後期
4	ドイツ語基礎演習 4	後期
5	ドイツ語基礎演習 5	後期
6	ドイツ語基礎演習 5	後期
7	ドイツ語基礎演習 5	後期
8	フランス語基礎演習 4	後期
9	フランス語基礎演習 5	後期
10	フランス語表現演習2	後期

グループ18

No.	科目名	学期
1	演習 G2	後期
2	演習 G4	後期
3	演習 G6	後期
4	演習 G12	後期
5	演習 H2	後期
6	演習 H4	後期
7	演習 H8	後期
8	演習 H10	後期
9	演習 I2	後期
10	演習 I4	後期
11	演習 I8	後期
12	演習 I10	後期

グループ19

No.	科目名	学期
1	演習 F2	後期
2	演習 F4	後期
3	演習 F6	後期
4	演習 F8	後期
5	演習 F10	後期

グループ20

No.	科目名	学期
1	キリスト教文化講義 2	後期
2	キリスト教文化講義 4	後期
3	合同講義 2	後期
4	実作・実践講義 2	後期
5	宗教思想 2	後期
6	日本文学概論	後期
7	世界史概論 2	後期
8	日本史概論 2	後期
9	教育制度・政策論	後期
10	家庭教育論	後期
11	入門講義 1	後期

グループ21

No.	科目名	学期
1	教育社会学 2	後期
2	文学講義 8	後期
3	文学講義 22	後期
4	文学講義 302	後期
5	文学講義 306	後期
6	文学講義 310	後期

グループ22

No.	科目名	学期
1	情報処理 1	前期
2	情報処理 2	後期
3	情報処理(PCプレゼンテーション)3	前期
4	情報処理(PCプレゼンテーション)4	後期

グループ23

No.	科目名	学期
1	フランス語表現演習2	後期
2	フランス語表現演習1	前期

表 1 6 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	経済学	後期
2	経済学	後期
3	経済学	後期
4	経済学	後期
5	経済学	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	簿記	後期
2	簿記	後期
3	簿記	後期
4	簿記	後期
5	簿記	後期
6	簿記	後期
7	簿記	後期
8	簿記	後期
9	簿記	後期
10	簿記	後期
11	簿記	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	情報処理入門2	後期
2	情報処理入門2	後期
3	情報処理入門2	後期
4	情報処理入門2	後期
5	情報処理入門2	後期
6	情報処理入門2	後期
7	情報処理入門2	後期
8	情報処理入門2	後期
9	情報処理入門2	後期
10	情報処理入門2	後期
11	情報処理入門2	後期

表 1 7 社会学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会調査法1	前期
2	社会学データ実習	前期
3	現代社会理論	前期
4	成熟社会論	前期
5	ジェンダーの社会学	前期
6	比較社会論	前期
7	コミュニケーションの理論	前期
8	質的研究法	前期
9	自己の社会学	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	高齢社会論	前期
2	少子社会論	前期
3	政治学1	前期
4	逸脱の社会学	前期
5	現代社会研究2	前期
6	フィールドワークの技法	前期
7	生命・身体社会学	前期
8	多変量解析	前期
9	社会学史	前期
10	現代社会研究1	前期
11	現代社会研究4	前期
12	産業システム変動論	前期
13	歴史社会学	前期
14	開発・発展の社会学	前期
15	現代社会研究5	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	社会調査法1	前期
2	社会統計学1	前期
3	国際社会と文化1	前期
4	現代社会と文化1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	比較文化論	前期
2	パフォーマンス文化論	前期
3	都市生活構造論	前期
4	都市文化政策論	前期
5	生活環境論	前期
6	環境のデータ分析	前期
7	社会運動論	前期
8	質的調査法	前期
9	まちづくり論	前期
10	多文化の社会理論	前期
11	文化とエスニシティ	前期
12	資源環境エネルギー論	前期
13	環境政策論	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法2	前期
3	社会調査法2	前期
4	社会調査法2	前期
5	現代社会論	前期
6	マス・コミュニケーション論	前期
7	情報行動論	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	現代史	前期
2	国際関係論	前期
3	現代経済	前期
4	時事問題研究	前期
5	データ分析	前期
6	情報法	前期
7	地域メディア論	前期
8	リスクコミュニケーション論	前期
9	webスタディーズ	前期
10	グローバル・コミュニケーション論	前期
11	流行論	前期
12	メディア産業論	前期
13	メディア各論3(出版)	前期
14	ジャーナリズム各論1(政治・経済)	前期
15	メディア理論	前期
16	コミュニケーション論	前期
17	記号論	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	社会学原論	後期
2	社会調査法2	後期
3	社会調査法2	後期
4	現代社会変動論	後期
5	公共性の社会学	後期
6	現代社会と政策	後期
7	社会統計学	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	共生社会論	後期
2	社会保障論	後期
3	データ処理法	後期
4	相互行為論	後期
5	地域社会学	後期
6	宗教社会学	後期
7	福祉の社会学	後期
8	社会階層論	後期
9	ライフコース論	後期
10	情報処理	後期
11	計量社会学	後期
12	差別と偏見の社会学	後期
13	文化の社会学	後期
14	保健・医療の社会学	後期
15	現代社会研究3	後期
16	平等と公正	後期
17	社会問題の社会学	後期
18	シミュレーションの社会学	後期
19	人口動態学	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	文化の社会理論	後期
2	社会調査法2	後期
3	社会学原論	後期
4	文化基礎論2	後期
5	都市と文化2	後期
6	国際社会と文化2	後期
7	環境と文化2	後期
8	現代社会と文化2	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	教育社会学	後期
2	文化変容論	後期
3	エスニシティ論	後期
4	アジア社会論	後期
5	生活文化論	後期
3	都市とメディア	後期
4	環境教育論	後期
5	環境と人類	後期
6	災害社会学	後期
7	社会心理学2	後期
8	都市とマイノリティ論	後期
9	グローバリゼーション論	後期
10	マイグレーション論	後期
11	言語と社会	後期
12	自然環境保全論	後期
13	環境の思想	後期
14	アーツマネジメント論	後期
15	ポピュラーカルチャー論	後期
16	国境を超える市民活動史	後期

グループ11

No.	科目名	学期
1	社会学原論	後期
2	社会調査法1	後期
3	情報社会論	後期
4	ジャーナリズム論	後期
5	メディア・コミュニケーション論	後期

グループ12

No.	科目名	学期
1	現代政治	後期
2	情報産業論	後期
3	オルタナティブ・メディア論	後期
4	応用調査実習	後期
5	比較マスコミ論	後期
6	受容過程論	後期
7	ジャーナリズム各論2(国際)	後期
8	ジャーナリズム各論3(映像報道論)	後期
9	メディア文化論	後期
10	ネットワーク文化論	後期
11	エスノメソドロジー	後期

表 1 8 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期
16	基礎演習	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期

表 19 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	前期
2	Cultural Exchange	前期
3	Cultural Exchange	前期
4	Cultural Exchange	前期
5	Cultural Exchange	前期
6	Cultural Exchange	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習2	後期
2	基礎演習2	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期
7	基礎演習2	後期
8	基礎演習2	後期
9	基礎演習2	後期
10	基礎演習2	後期
11	基礎演習2	後期
12	基礎演習2	後期

表 20 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	前期
2	※(社会福祉・精神保健福祉)援助技術総論	前期
3	介護概論	前期
4	医学概論	前期
5	高齢者福祉論	前期
6	地域福祉論	前期
7	精神保健福祉論2	前期
8	医療福祉論	前期
9	精神保健福祉援助技術各論1	前期
10	司法福祉論	前期
11	精神保健学1	前期
12	精神保健福祉援助技術各論2	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	生活習慣病の科学	前期
2	身体文化論	前期
3	スポーツコーチ学	前期
4	運動・スポーツ栄養学	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	前期
2	※(社会福祉・精神保健福祉)援助技術総論	前期
3	介護概論	前期
4	医学概論	前期
5	高齢者福祉論	前期
6	地域福祉論	前期
7	精神保健福祉論2	前期
8	医療福祉論	前期
9	精神保健福祉援助技術各論1	前期
10	司法福祉論	前期
11	精神保健学1	前期
12	精神保健福祉援助技術各論2	前期
13	福祉機器論	前期
14	社会福祉法制	前期
15	家族臨床心理学	前期
16	福祉カウンセリング入門	前期
17	福祉産業論	前期
18	老年臨床心理学	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	少子高齢社会論	前期
2	家族政策	前期
3	現代コミュニティ論	前期
4	地方自治論	前期
5	健康政策	前期
6	スポーツ政策	前期
7	国際経済論	前期
8	地方財政論	前期
9	ライフサイクルの心理学	前期
10	まちづくり論	前期
11	コミュニティ・ビジネス	前期
12	政策過程論	前期
13	社会開発論	前期
14	公共哲学	前期
15	住宅政策	前期
16	教育政策	前期
17	自治体政策計画論	前期
18	災害心理学	前期
19	福祉とレクリエーション	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	生活習慣病の科学	前期
2	身体文化論	前期
3	スポーツコーチ学	前期
4	運動・スポーツ栄養学	前期
5	運動生理学	前期
6	運動方法学	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	現代キリスト教人間学	前期
2	福祉文化論	前期
3	老年学	前期
4	障害学入門	前期
5	家族社会学	前期
6	宗教心理学	前期
7	発育・発達・加齢論	前期
8	福祉人間学	前期
9	グリーフスタディ	前期
10	宗教人間学	前期
11	社会福祉発達史2	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	社会学2	後期
3	心理学2	後期
4	公的扶助論	後期
5	障害者福祉論	後期
6	精神医学2	後期
7	グループワーク	後期
8	社会福祉原論	後期
9	介護保険論	後期
10	精神保健学2	後期
11	精神科リハビリテーション学2	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	運動療法論	後期
2	スポーツ社会学	後期
3	スポーツ心理学	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	公的扶助論	後期
2	障害者福祉論	後期
3	精神医学2	後期
4	グループワーク	後期
5	社会福祉原論	後期
6	介護保険論	後期
7	精神保健学2	後期
8	精神科リハビリテーション学2	後期
9	社会福祉と法	後期
10	家族福祉論	後期
11	発達障害論	後期
12	リハビリテーション論	後期
13	リハビリテーション心理学	後期
14	福祉学特論	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	コミュニティと宗教	後期
2	市民参加論	後期
3	福祉政策	後期
4	平和学	後期
5	世界と宗教	後期
6	余暇生活論	後期
7	環境政策	後期
8	比較文化心理学	後期
9	異文化コミュニケーション	後期
10	障害者スポーツ論	後期
11	障害者スポーツ実践論	後期
12	障害者スポーツ実践論	後期

グループ11

No.	科目名	学期
1	運動療法論	後期
2	スポーツ社会学	後期
3	スポーツ心理学	後期
4	体カトレーニング論	後期

グループ12

No.	科目名	学期
1	社会調査法	後期
2	情報処理2	後期
3	哲学的人間学	後期
4	人権論	後期
5	生命倫理	後期
6	キリスト教社会福祉	後期
7	社会保障論2	後期
8	宗教思想史	後期
9	社会福祉施設経営論	後期
10	グループダイナミックス	後期
11	死生学	後期

グループ13

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	社会学2	後期
3	心理学2	後期
4	生涯学習概論2	後期
5	社会教育計画2	後期

グループ14

No.	科目名	学期
1	社会調査法	後期
2	リサーチ方法論2	前期

表 2 1 現代心理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	心理学概説1	前期
2	心理学概説2	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読1	前期
2	心理学文献講読1	前期
3	心理学文献講読1	前期
4	心理学文献講読1	前期
5	心理学文献講読1	前期
6	心理学文献講読1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読2	後期
2	心理学文献講読2	後期
3	心理学文献講読2	後期
4	心理学文献講読2	後期
5	心理学文献講読2	後期
6	心理学文献講読2	後期

グループ5

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読1	前期
2	心理学文献講読1	前期
3	心理学文献講読1	前期
4	心理学文献講読1	前期
5	心理学文献講読1	前期
6	心理学文献講読1	前期
7	心理学文献講読2	後期
8	心理学文献講読2	後期
9	心理学文献講読2	後期
10	心理学文献講読2	後期
11	心理学文献講読2	後期
12	心理学文献講読2	後期

グループ6

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法2	後期

表 2 2 全学共通カリキュラム

グループ1

No.	科目名	学期
1	歴史と現代	前期
2	キリスト教と諸思想	前期
3	多文化の世界	前期
4	メディアと人間・社会	前期
5	大学とミッション	前期
6	美術の歴史	前期
7	音楽の歴史	前期
8	表象文化	前期
9	江戸と文学	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	キリスト教と諸思想	前期
2	現代社会と人間	前期
3	歴史と社会	前期
4	歴史と社会	前期
5	歴史と資料	前期
6	多文化の世界	前期
7	メディアと人間・社会	前期
8	文学と社会	前期
9	表象文化	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	個人と社会	前期
2	多文化共生と平和	前期
3	政治とマスコミ	前期
4	世界経済と日本	前期
5	現代社会と法	前期
6	政治と社会	前期
7	経営学の世界	前期
8	平和とコミュニティ	前期
9	持続可能な社会と平和	前期
10	朝鮮半島と日本	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	現代社会と法	前期
2	経営学の世界	前期
3	現代社会とツーリズム	前期
4	政治と社会	前期
5	企業と社会	前期
6	スポーツとメディア	前期
7	市場と社会	前期
8	世界経済と日本	前期
9	個人と社会	前期
10	日本国憲法	前期
11	経営学の世界	前期
12	企業と社会	前期
13	フランス語圏の社会	前期
14	ジェンダーの現在	前期
15	近代日本社会と人権	前期
16	グローバリゼーションと平和	前期
17	民族紛争と平和	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	心の科学	前期
2	自然環境と人間	前期
3	心の健康	前期
4	対人関係の心理	前期
5	スポーツの科学	前期
6	物質の科学2	前期
7	都市環境と人	前期
8	地球環境の未来	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	認知・行動・身体	前期
2	心の健康	前期
3	レジャー・レクリエーションと現代社会	前期
4	高齢化社会におけるヒトの弱点と予防法	前期
5	心の科学	前期
6	認知・行動・身体	前期
7	心の進化	前期
8	身体コンディショニング論	前期
9	癒しの科学	前期
10	ストレスマネジメント	前期
11	対人関係と自己理解	前期
12	環境の成立と人間活動	前期
13	数学の世界	前期
14	物質の科学2	前期
15	宇宙の科学1	前期
16	生命の科学	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	聖書と人間	前期
2	キリスト教と諸思想	前期
3	歴史と資料	前期
4	メディアと人間・社会	前期
5	ドイツ語圏の文化	前期
6	スペイン語圏の文化	前期
7	聖書と人間	前期
8	論理的思考法	前期
9	多文化の世界	前期
10	文学と歴史	前期
11	文学と社会	前期
12	美術と社会	前期
13	音楽と社会	前期
14	信仰と説話文学	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	都市と政策	前期
2	北京オリンピックを考える	前期
3	福祉と人間	前期
4	現代社会とツーリズム	前期

グループ9

No.	科目名	学期
1	栄養の科学	前期
2	現代人とサプリメント	前期
3	認知・行動・身体	前期
4	パーソナリティの心理	前期
5	対人関係の心理	前期
6	地球の理解	前期
7	武蔵野の自然	前期
8	生態系と人間の未来	前期
9	生物の多様性	前期

グループ10

No.	科目名	学期
1	論理的思考法	前期
2	聖書と人間	前期
3	キリスト教思想の展開	前期
4	医療過誤と患者の権利	前期
5	市場と社会	前期
6	在日外国人と日本社会	前期
7	表象文化	前期
8	音楽と社会	前期
9	キリスト教音楽	前期
10	物質の科学1	前期
11	宇宙の科学1	前期
12	数学の世界	前期
13	物質の科学1	前期
14	情報科学A	前期

グループ11

No.	科目名	学期
1	キリスト教思想の展開	後期
2	多文化の世界	後期
3	朝鮮語圏の文化	後期
4	キリスト教思想の展開	後期
5	歴史と現代	後期
6	歴史と資料	後期
7	メディアと人間・社会	後期
8	文学と歴史	後期
9	文学と人間	後期
10	音楽の歴史	後期

グループ12

No.	科目名	学期
1	世界経済と日本	後期
2	日本国憲法	後期
3	個人と社会	後期
4	福祉と人間	後期
5	情報と倫理	後期
6	ドイツ語圏の社会	後期
7	現代社会と宗教	後期
8	スポーツジャーナリズムの現在	後期
9	規制改革を考える	後期

グループ13

No.	科目名	学期
1	対人関係の心理	後期
2	支え合いの諸相	後期
3	心の健康	後期
4	パーソナリティの心理	後期
5	物質の科学1	後期
6	行動の科学	後期
7	生命のしくみ	後期

グループ14

No.	科目名	学期
1	現代社会と人間	後期
2	歴史と社会	後期
3	中国語圏の文化	後期
4	生と死の宗教学	後期
5	歴史と社会	後期
6	歴史と資料	後期
7	多文化の世界	後期
8	美術と社会	後期
9	美術の歴史	後期
10	キリスト教美術	後期

グループ15

No.	科目名	学期
1	情報と倫理	後期
2	法学の世界	後期
3	大学と現代社会	後期
4	市場と社会	後期
5	個人と社会	後期
6	福祉と人間	後期
7	法学の世界	後期
8	政治と社会	後期
9	政治と社会	後期
10	スペイン語圏の社会	後期
11	中国語圏の社会	後期
12	大学と現代社会	後期
13	食の安全性と行政の対応	後期
14	少年法の現在	後期

グループ16

No.	科目名	学期
1	パーソナリティの心理	後期
2	スポーツと文化	後期
3	スポーツの科学	後期
4	脳と心	後期
5	からだの科学	後期
6	心の健康	後期
7	パーソナリティの心理	後期
8	対人関係の心理	後期
9	対人関係の心理	後期
10	健康の科学	後期
11	宇宙の科学2	後期
12	行動の科学	後期
13	オーダーメイド医療最前線	後期
14	宇宙の科学1	後期
15	宇宙の科学2	後期
16	生命の科学	後期
17	生命の歩み	後期
18	生命倫理とキリスト教	後期
19	都市と野鳥	後期

グループ17

No.	科目名	学期
1	思索と人生	後期
2	聖書と人間	後期
3	歴史と現代	後期
4	キリスト教考古学	後期
5	文学と歴史	後期
6	文学と人間	後期
7	音楽と社会	後期
8	文学と歴史	後期
9	文学と社会	後期
10	美術の歴史	後期
11	外国文学とキリスト教	後期
12	都市と芸術	後期

グループ18

No.	科目名	学期
1	フランス語圏の社会	後期
2	平和とは何か	後期
3	立教大学の歴史	後期
4	都市と新しい社会運動	後期
5	市場と社会	後期
6	現代社会と環境	後期

グループ19

No.	科目名	学期
1	支え合いの諸相	後期
2	からだの科学	後期
3	レジャー・レクリエーションと現代社会	後期
4	健康の科学	後期
5	数学の世界	後期
6	物質の科学2	後期
7	数学の世界	後期

グループ20

No.	科目名	学期
1	多文化の世界	後期
2	フランス語圏の文化	後期
3	性倫理とキリスト教	後期
4	福祉と人間	後期
5	企業と社会	後期
6	企業と社会	後期
7	現代社会とツーリズム	後期
8	ジェンダーの現在	後期
9	大学と現代社会	後期
10	表象文化	後期
11	文学と人間	後期
12	表象文化	後期
13	乱歩再発見	後期
14	ウェルネス実践論	後期
15	物質の科学1	後期

教育調査の検討グループ (2010年10月現在)

座長	西原 廉太 (副総長、文学部)
	山口 和範 (経営学部長)
	東條 吉純 (教務部副部長、法学部)
	塚本 伸一 (入学センター長、現代心理学部)
	成田 康昭 (キャリアセンター部長、社会学部)
	菊地 進 (経済学部)
事務局	石田 和彦 (企画部企画課)
	今田 晶子 (大学教育開発・支援センター)
	伊藤 直子 (大学教育開発・支援センター)

2009年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	東條 吉純 (教務部副部長、法学部)
	田崎 英明 (現代心理学部)
事務局	今田 晶子 (大学教育開発・支援センター)
	伊藤 直子 (大学教育開発・支援センター)
	間中 賢治 (教務事務センター)
	増田 絵里子 (新座キャンパス事務部教務課)

2009年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2010年10月発行

編集 立教大学 2009年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 株式会社 ナナオ企画

〒104-0043 東京都中央区湊 1-6-11

TEL 03-3297-2805 FAX 03-3297-2807